

東京大学大学院新領域創成科学研究科
環境学専攻社会文化環境コース

平成 17 年度

修士論文

縄文時代晩期における環境適応の一環としての生業構造の特性について

愛知県渥美郡渥美町(現田原市)伊川津遺跡を一例に

2006 年 1 月提出

指導教員 佐藤 宏之 助教授

学籍番号 36735

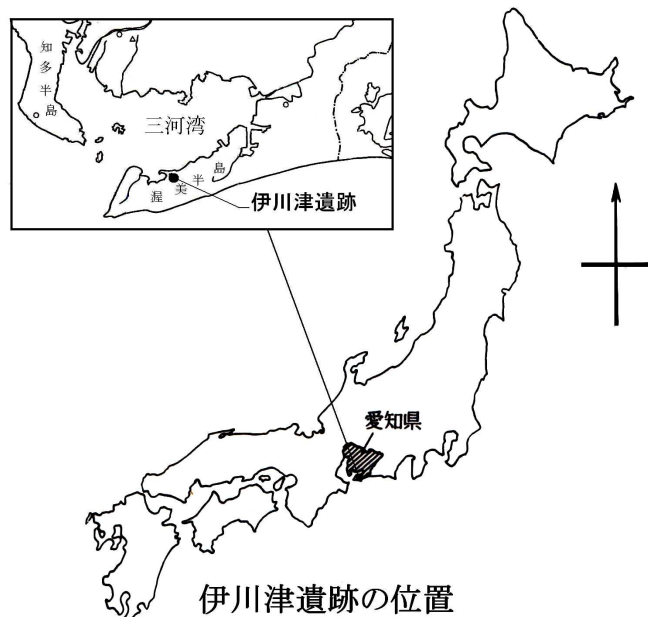
平林利文

はじめに

海岸部の縄文時代遺跡は、その生活の一端を窺い知りうる痕跡として、しばしば貝塚の堆積を残す。E・S モースによる大森貝塚の発掘により、日本考古学の黎明が告げられたことはよく知られている。このように日本の先史時代を知りうるための素材としてその重要性はつとに認識されてきた。日本列島には数多くの貝塚が存在し、金子浩昌によれば日本列島沿岸部には約 1000 の縄文貝塚があり、そのおよそ 8 割は東海・関東・東北の太平洋岸に集中している。具体的には三河湾・東京湾・仙台湾においてそれは特に稠密である。その中で、本研究においては三河湾沿岸の渥美半島地域を対象として採り上げる。

三河湾沿岸地域は日本列島の中において東京湾・仙台湾沿岸域と並ぶ貝塚集中地域である。東京湾・仙台湾の両地域においては、既にこの地域に特化したあついで先行研究が存在するが、三河湾域においては前 2 者に比してそれほど多くはない。

そこで、本研究は縄文時代人が年間を通じての食糧を確保するために、資源環境に対する適応戦略を把握することが、彼等の文化的・社会的な性格を理解する上で重要な課題の一つであるという認識に基づき、愛知県渥美郡渥美町(現田原市)伊川津遺跡を一つの例としてとり、そのなかで漁撈活動に注目する。そして、漁撈技術とその獲物の構成を主眼に据え、そこに現れる環境適応戦略の特性と安定性をあきらかにすることを目的とした。研



究の方法としては、出土遺物 / 動物遺存体の考古学的分析に加えて、漁撈技術を中心とした生業構造の特性をよりあきらかにすることを旨とするために、現存する民族(俗)例及び文献史資料に現れている過去の漁撈民の姿を参照枠とする、所謂民族考古学 (ethno-archaeology) といわれる方法をここでは採用する。無論、単純な比較 / 類推が孕む種々の誤謬を看過するつもりはないが、しかし、漁業技術に関する限り、環境特性・水産資源特性に規定される側面が強く、伝統的な技術が長期間にわたって保持される傾向が既に民俗学等隣接諸分野によりあきらかにされているので、参照枠としての有効性は一概に否定されるべきものではないと考える次第である。

第1章 伊川津遺跡とはなにか - その環境的位置づけと研究略史 -

考古学もしくはその隣接・関連分野に通じているひとであれば、伊川津遺跡について詳細なる説明は不要であろう。とはいえ、どのような分野にもありうることではあることだが、通説に対して必ずしもコンセンサスが確立されている場合ばかりではなく、また論者によってもその位置づけに微妙な差異があるのも、殊この分野に限ったことではないということも、容易に察しがつくことでもあろう。従って、拙論において主たる対象として取り上げられる伊川津遺跡について、些か冗長に過ぎる惧れなしとはしないものの、一方で一度その位置づけを明確にする意義も少なからず存在するとの観点と理解への一助とならんと思量するが故に、本章においてはその定義付けに類するささやかな議論を試みる次第である。

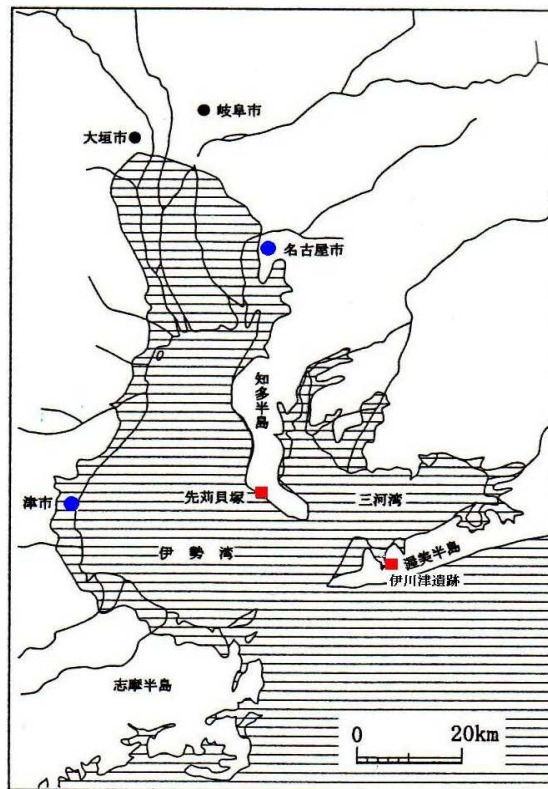
1. 周辺及び立地環境論

海岸部の縄文時代遺跡は、その生活の一端を窺い知りうる痕跡として、しばしば貝塚の堆積を残す。E・S モースによる東京の大森貝塚の発掘により、日本考古学の黎明が告げられたことは一般にもよく知られている。このように日本の先史時代を知りうるための素材としてその重要性はつとに認識されてきた。日本列島には数多くの貝塚が存在し、正確な数は確定されてはいないが、鈴木公男によれば縄文時代か中世に至るまででおよそ 3000 箇所であるといわれその大半が縄文時代のものであるとされる(鈴木 1989)。そして、その大半は東海・関東・東北の太平洋岸に集中している。具体的には三河湾・東京湾・仙台湾がその密集地域であり、なおかつ稠密でもある。拙論において取り上げられる伊川津遺跡は、このうちの三河湾沿岸域に位置する貝塚遺跡である。

当該遺跡を知るためのよすがとして、またすぐれて重要な要素である遺跡の立地等に関する記述から始めたい¹。伊川津遺跡は、東に遠州灘(太平洋)、西に三河湾を臨む渥美半島のほぼ中央にあって、愛知県渥美郡渥美町大字伊川津地内(現在は町村合併により田原市伊川津町となる)に所在する、縄文晩期を中心とする貝塚遺跡である。古くから伊川津貝塚として呼びならわされていたが、すでに貝塚だけでなく墓地等を含む集落遺跡である点が鑑みられ、近年は伊川津遺跡と呼称されるに至っている。伊川津の集落は、黒潮のあらう遠州灘とは対照的な三河湾を臨み北向きを開けた礫堆上にあって、古来よりの海との深いかわりのある生活を保ち続けてきたことを偲ばせる。黒潮がかすめる著名なる伊良湖岬が近くにあることから、温暖なる気候が往時よりの人々の生活を育んできたのであろうことは容易に想像に難くない。

まずは、貝塚が海と陸にいる人間との交渉の痕跡という点に鑑みてその重要性を指摘できるであろう陸と海の境界線である海岸線(図 1)と海そのものについて、日本列島の全般的な傾向から目を向けてみることにしよう。それから、ミクロ的に当該地域に視点は向けられることとなろう。海岸線は、日本列島の全般的な傾向として最終氷期(約 6 万～1 万年前)の極盛期に現海面比約 100m 前後低下していた海面が、世界的な気温の上昇による大陸氷床の融解により、約 15000 年前から急上昇を始め、約 11000 年前に至って現海面比 - 20

層相をもつ地層が堆積を見せることとなり、併せて前述の海面再低下の際の侵食により谷を形成するところが多く見られた。その後は、10m/1000年の速度で海面は再び上昇し、約6000年前には現海面付近³に達し、僅かの変動を伴いつつ現在に至っている。このように、後氷期においては河川の堆積速度を上回る速さの海面上昇により海岸線は内陸に向かい前進し、縄文海進即ち前述した約6000年前に達した海面上昇のことだが、その際には著しい湾入に富む沈水海岸線の形をとることになった。この溺れ谷を埋めた堆積物が現在

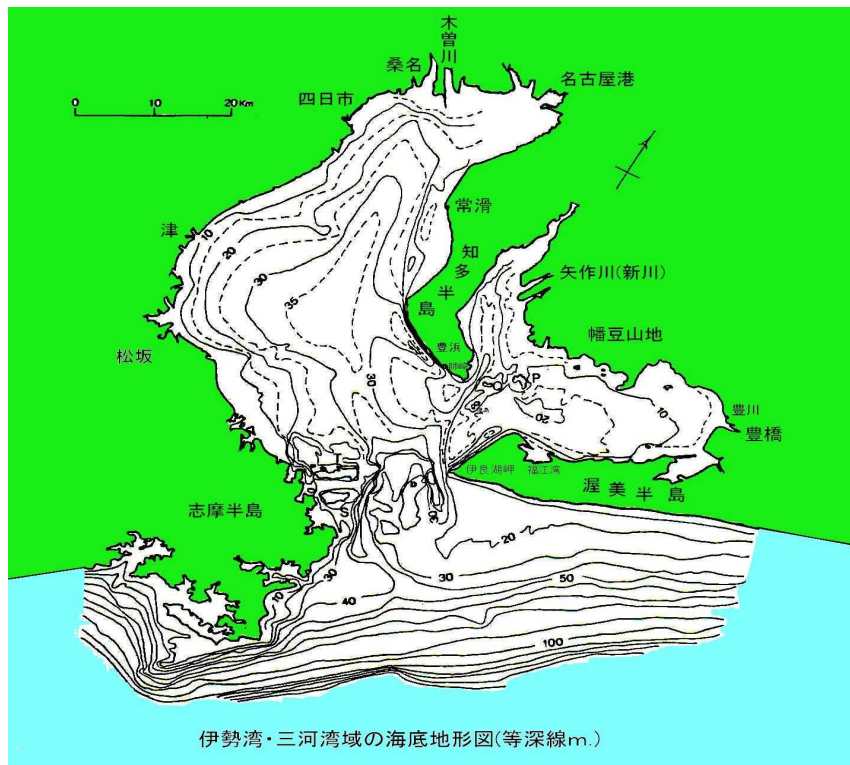


縄文海進最盛期の海岸線 (図 2⁴)

海岸地域の沖積低地と浅海底を形成している。当時の海岸線は沈水海岸線を示し、最終氷期の海岸線に比べると現在のものにかかなり近いとされる。特に、比較的固結した岩石からなる山地沿いの海岸では 1/400 万の縮尺では海岸線の位置は現在と同じと見られている。とはいえ、注でも指摘しおいたが、関東平野などに代表される大きな構造的な諸平野では海岸線は現在よりも著しく内陸にあった。一方で、湾入した入り江や溺れ谷の間や丘陵や台地では、海食による陸地の後退が見られる。海食崖の後退は一般に海岸線付近の構成層が未固結であるほど速い。今回の拙論においてとりあげられることになる伊川津遺跡の立地する渥美半島の南部は海食の著しいことで著名である。縄文海進高頂期以降には、4500年前頃と2000年前頃に小海退があったようで、特に後者は弥生海退といわれ⁵、かなり普遍的に認められる。縄文海進高頂期に溺れ谷となった浅海底は、最近5000年間における小海退や河川との堆積作用によって埋め立てられ、自然堤防や三角州の拡大によって次第に陸化した。(日本第四紀学会 1987)

続いて、ミクロ的な伊川津遺跡周辺環境に視点を向けてみることにしよう。主として三

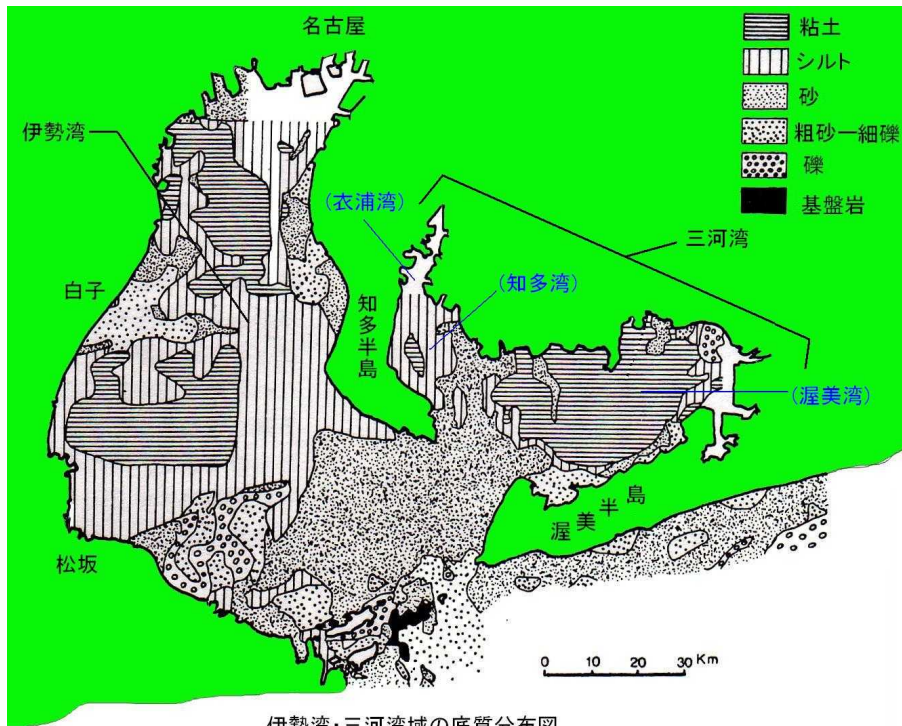
河湾沿岸を中心に、加えてその周辺域の地形・地質・海洋環境等に焦点は絞られる。まずは海底地形からみていきたいとおもう。海の生業を論じる上で、獲物たる海洋生物の生態と密接な関係があると思われ、またそれらについて考える際に何らかの示唆を提示し得るとの目論見からである。



(図 3⁶)

伊勢湾および三河湾のそれぞれの面積はおよそ 1740 km²および 602 km²、前者は後者の約 3.4 倍、その容積は 34 km³および 5.5 km³で、約 6.2 倍にあたる。平均深度は前者で 19.5m で後者については後述するがかなり浅いということだけは言える。伊勢湾の最深部は三重県側白子と知多半島野間を結ぶ湾中央部の窪みで 30 数 m あるとされ、この水域を取り囲む形で 30m 等深線が南北のかなりの範囲にわたって広がり、中央部から湾口部に及んでいる。湾口部に 50~100m の深さの細長い狭小な水域があるが外海で再び浅くなる。三河湾域の水深は、湾中央部の最深部は - 24m である。この湾中央部は比較的なだらかな海底面をなしており、沿岸から湾中央にむかって次第に深さを増していく。南側の渥美半島側は湾岸から急に深くなるいわゆる「かけあがり」的な様相を呈している。この「かけあがり」的地形は、現代でも釣師や漁師の間で好漁場とされている。湾奥の豊川河口には三角州頂面のつくる - 50m 域が発達している。また、北岸の幡豆海岸には基盤の突出部があり、一部は梶島などの島や暗礁となっている。こうした海底地形の高まりは、さらに南方まで追跡することができ、沖合 7km まで細長い高まりが湾中央に向かって伸びている。これは沖の瀬砂堆とよばれ、その頂面には礫を含んでいたりするので、洪積段丘の突出部と推定される。さらには、湾口部には幾つかの島や暗礁が存在し複雑な海底地形を呈している。図 2 にはこれらを簡略化して提示してある。知多半島の南端の師崎と日間賀・篠島間の師崎水道には - 40m に達する細長い海底の凹地である「海釜」が存在し、さらに渥美半島の西端の西ノ

浜沿いにも - 30m に達する細長い舟形の「海釜」が存在している。



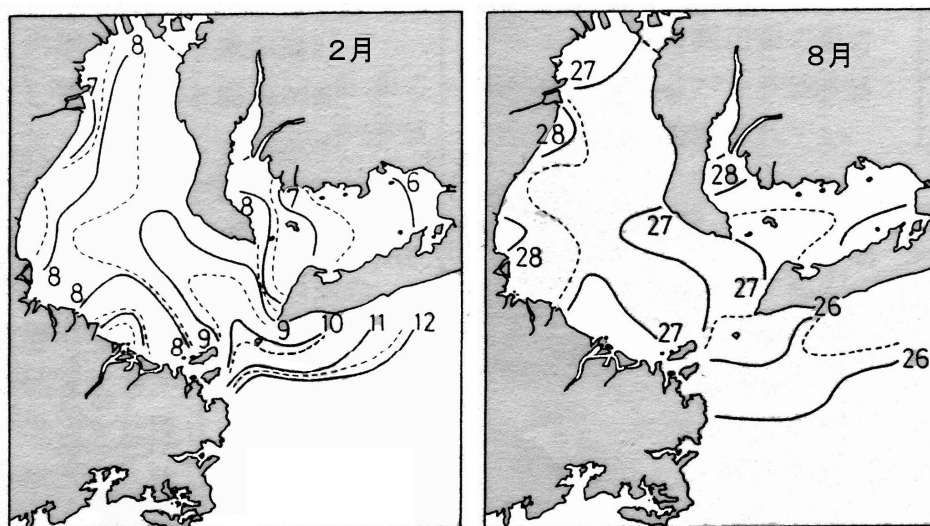
伊勢湾・三河湾域の底質分布図

(図 4⁷)

三河湾の底質は図3に示すように、湾口部一帯に砂(主として細砂)が広く分布している。伊良湖岬先端の潮汐流の特に激しいところでは細礫混じりの粗砂となっている。これに対して、衣浦湾域の底質はシルト質の細粒物によって占められ、三河湾の湾中央にも広く粘土質の底質が広がっている。こうした湾中央部と湾口部の底質の違いは、海底の地形と結びついた湾内潮汐流の状況を反映していると考えられる。また、矢作川河口の三角州頂面には砂質が堆積しているのは前述のとおりである。さらに、沖の瀬砂堆や蒲郡から竹島・大島などの南に延びる基盤突出部の周辺にも砂質の底質が分布しており、加えて、豊川河口の三角州を外れた北側寄りには礫質の底質が分布しているが、これは豊川右岸の小坂井段丘の延長部の沈水したものが湾底に露出していると考えられている。渥美半島先端北岸の福江港沖にも礫質底質が分布しているが、これは、海底 - 5m 前後の平坦面の分布ともほぼ一致しており、これも沈水した低位段丘礫層が露出しているという。渥美半島の南岸沿いには主として砂質の底質が分布しており、数 km 沖に礫質の堆積物が認められるのであるが、これは渥美半島を構成する渥美累系層中の礫質が直接露出しているものと考えられている(日本海洋学会沿岸海洋研究部会 1985)。

海況即ち水の動きにも目を向けてみたいと思う。この要素は、海洋生物の生態にも少なからず影響を与える要素であるから、一瞥をくれることもあながち無益ではないであろう。まず、海水温等に関して見てみよう。先述のように、伊勢湾・三河湾は総じて浅く、伊勢湾域の平均水深がおよそ 20m で最大でも 30m であり、三河湾はさらに浅く、平均水深は 9m 余りに過ぎない。当然のことながら、この環境要素は海水への様々な影響をもたらす。水温やあるいは塩分濃度などの要素はこの環境の影響を受ける要素のひとつであると言え

よう。浅海は一般的に温度変化がしやすい傾向にあるとされる。無論、これは風や河川流入などの影響により種々の変化をこうむることは言うまでもない。図4は2月と8月のこの地域海水温の水平分布の図である。表面水温の最大は8月に見られる。最高水温の起時は深さとともに遅れ、水深30mの層には9月に至って起こる。そして、9月には海面の冷却が始まり、10月には上下層の温度はほぼ一様に近づく。そして、2月の水温最低期に至

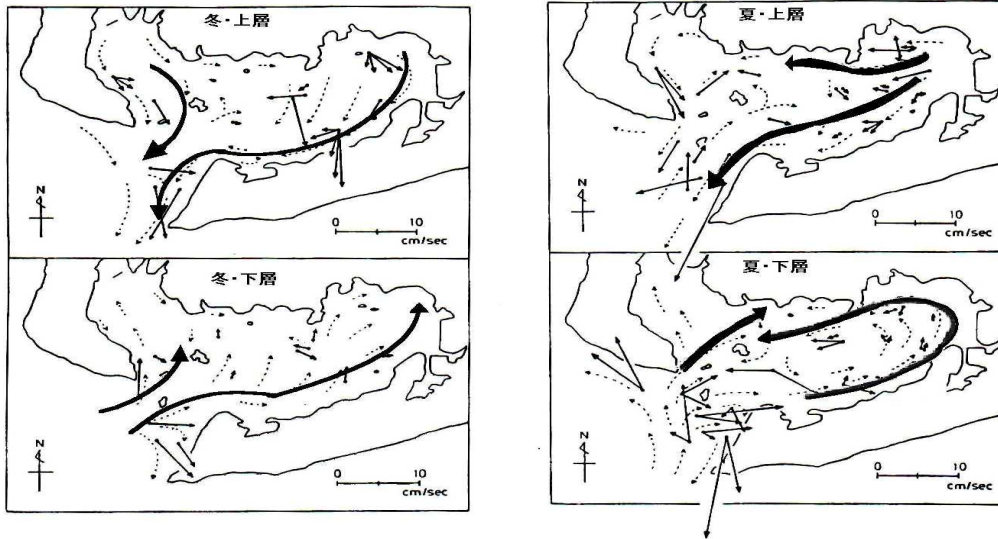


2月と8月における表層の水温

(図 5⁸)

るのである。冬季になると、海面が冷やされ、風も強く、淡水の供給も少ないので、上下の混合がよく行われ湾内の一様性は高い。水温は概要の影響を受けやすい下層の方が上層より多少高いという逆転現象が生じている(日本海洋学会沿岸海洋研究部会 1985) (船越 1981)。

続いて、流れについて触れておこうと思う。湾内で日常卓越する流れは1日に2回周期的に変化する潮流である。この潮流は、その主軸が湾の縦断方向を向き、その大きさは湾口から振動の腹にあたる湾奥に向かって減少している。また、湾口では狭くなるために流れが強まる効果がある。この海域で最も大きな流れは伊勢湾口部の東半分に見られ、大潮時には2ノット程度の流れを生じ最強部では3ノットに達し渦を生じさせる。西半分は浅瀬が多く、東側ほど流れは強くないが、それでも三河湾口では最強潮流速は2ノット前後に達することはある。次に恒流について言及しておきたいと思う。恒流とは、潮の流れの捉え方の一つであり、潮の流れの観測値の長期間な平均値と考えられるものであり平均流とも言う。目に見える潮の流れである潮流は、主に潮汐によって数時間周期で変化するが、恒流はより長期的で定常的な潮の流れであり、恒流を利用して水質汚濁物質などの平均的な移動の状況を知ることが可能である(大阪湾新社会基盤研究会 1996)。伊勢湾については割愛し主として三河湾の恒流についてみていきたいと思うが、一点だけ指摘しておけば、伊勢湾域の恒流には南部で反時計回りの還流、北部で時計回りの還流が存在すると考えられている。さて、三河湾の恒流についてはあるが、雑駁な捉え方であるが、図5にまとめてみた。それぞれ冬季と夏季の上層と下層の恒流を模式化したものである。冬季には渥



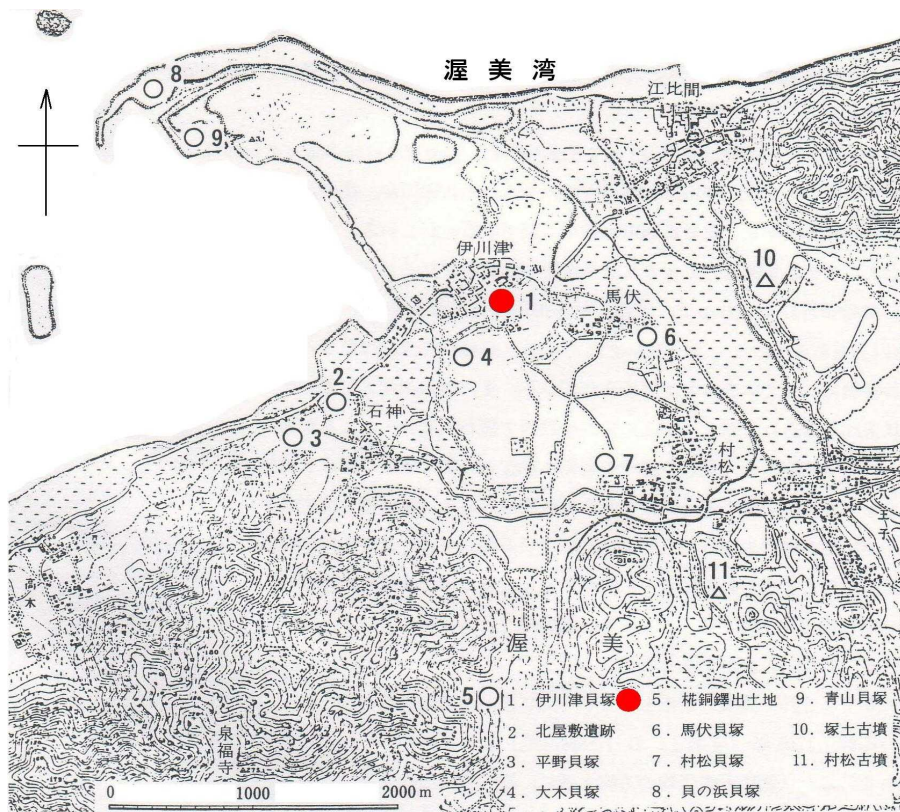
三河湾の冬と夏の上層と下層における恒流(平均流)の分布。(図 6)

美湾の上層は南下流、下層は北上流となり鉛直循環が南北に発達しているのが読み取ることが出来るであろう。三河湾口の海水の出入りは一様ではなく、下層は流入、上層は流出で上層中央付近にも流入が見られる。夏季には、渥美湾奥の上層には西流が多く、渥美半島沿いには上層は流出、下層は流入となっており東西方向の鉛直循環が発達している。この下層の流れは、渥美湾内で反時計回りの還流を形成している。三河湾口部では下層と上層の一部で流入し、知多・渥美の両半島側で流出している。特に渥美半島先端付近には、両季節とも全層にわたり強い流出が見られる。冬季と夏季の流速を比べると、三河湾東部の上層では冬季のほうが大きい、下層では全般的に夏のほうが大きいようである。(日本海洋学会沿岸海洋研究部会 1985)

ここまで主として海岸線から海に眼を向けて伊川津遺跡周辺環境を見てきたわけだが、ここからは視点は遺跡の立地にかかわる陸に振り向けられることとなる。ここでは特に遺跡が立地する、渥美半島に主眼が置かれるようにする心算である。

伊川津遺跡が立地する渥美半島(図 7)は、中部高地の南西部に位置し、赤石山脈に続く弓張山地の延長で、秩父古成層を主軸とした脊梁の山塊が西南西に連なっており、更新世の地層がその周囲を取り巻いている。遺跡の南方の大山(海拔 327.9m)は渥美半島の最高峰であり、三河湾岸に面しては深い谷を形成し、北に傾斜する洪積台地を削って水の流れが三河湾へ向かって注いでいる。これらが、東から江比間谷、石神谷、福江谷となって洪積台地を開析した侵食谷群となっている。伊川津遺跡は、江比間谷の谷口の西端の台地末端の崖下に発達した旧浜堤上に立地している。福江湾東岸礫堆群の最内列中央、現在の伊川津集落を載せる礫堆(伊川津礫堆)上に遺跡は占地しており、遺跡の前面には福江湾の最奥部、背後には台地先端が迫り、東を江比間谷、西を石神谷の谷口によって画されている。さらに、福江湾岸および半島先端部では顕著な礫堆の形成が認められ、また最内列の礫嘴は、江比間 石神間の谷口を結ぶように断続的に形成されており、縄文海進時に形成された旧浜堤と推定される(井関 1974)(樋泉 1993)。因みに礫嘴とは、陸地から海方向に嘴状に細長く伸びた海面上に出た礫の高まり即ち礫州のことで、海岸線の方向が鋭く陸側に曲がって

いるような場所に出来るものである(廣木 2002)。礫堆を形成している礫は直径 0.8~1.5cm 内外で、遺跡に隣接する国道 259 号線の走っている江比間から伊川津にかけて同様であるが、伊川津遺跡の東の谷を流れる女郎川が、椋の谷に源を発して村松・馬伏の東端に見られる崖下を流れる新堀川に接する線で中断されている。一時はこの礫堆が江比間の洪積台地と大本台地とを閉塞して大きな後背湿地を作り上げたとされている。この湿地は谷口で 800m で、谷頭の村松部落でも 600m あり、八王子部落の扇状地まで 1.5km 以上もあるもので、腐植土を含む黑色シルトが認められその直下が海成砂礫層になっていることも確認されている。



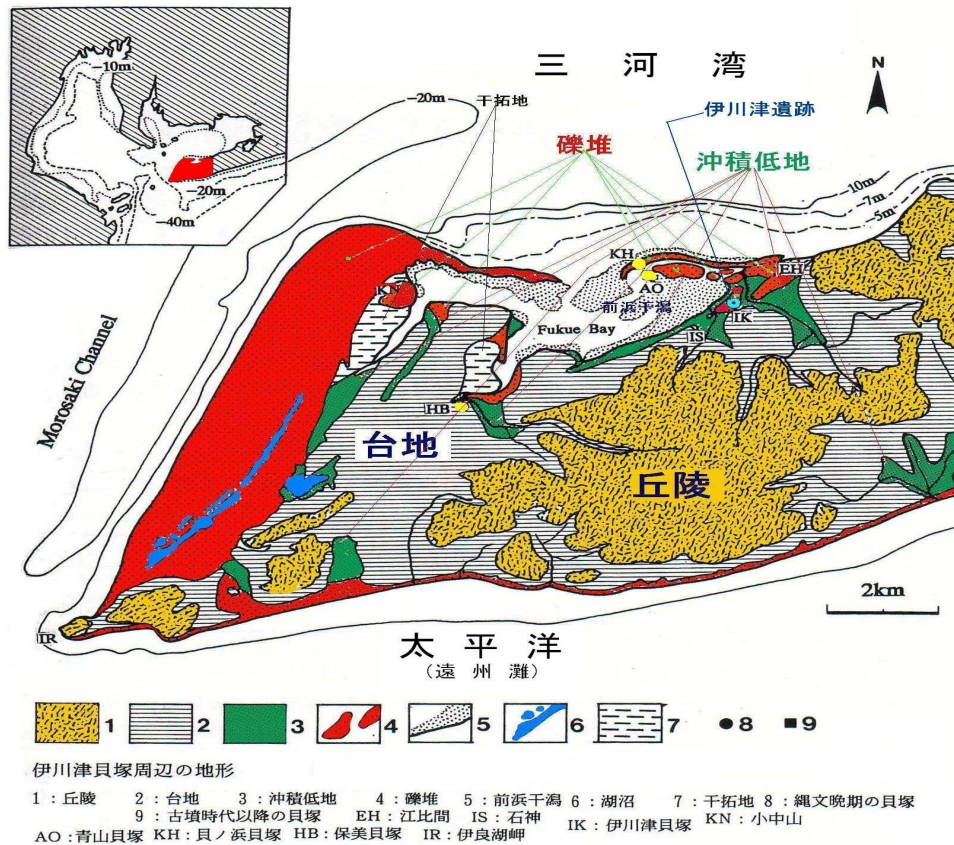
伊川津遺跡の位置 (明治 26 年 6 月 30 日発行の地図から作成)

(図 7)

また、海水が浸入していたことを示す海岸堆積地形が馬伏集落で見られており、崖面に含貝砂礫層で覆われているところがある。この礫堆で閉塞された北方の海側には次の時期に礫堆が形成され、福江湾に屈曲している礫堆がある。椋に端を発する水系は新堀川となって江比間・伊川津の礫堆を切って三河湾に注いでいるが、やはり北東方向の波浪による砂礫の形成で海に出る道が絶えず塞がれ、西に向かって流路を変え、貝の浜の礫堆は内陸部に向けて極度に湾曲していて、その先端は標高 2.5m 程にも達する。このように 2 列の礫嘴が形成されている海に面したほうの貝の浜礫嘴は江比間集落から 3km も突出しているが、1706 年の「山論絵図¹⁰」などにはさらに大きな規模であった様子が記されている。これは礫嘴形成当時の方向と逆に、漂流礫が西から東へと向かって移動していることを示しており今も貝ノ浜海岸が浸食されていることがみられており、面積が狭くなったものであろうと考えられている。

続いて、伊川津とかかわりの深い水域環境について言及しておきたいと思う。尚、この

点に関しては、樋泉岳二により手際よくまとめられているのでそれを参照することとし、その記述に依拠するものである(樋泉 1993)。



(図 7¹¹)

伊川津遺跡周辺の水環境は、基本的には河川と湖沼からなる内水面領域と、三河湾内および伊勢・三河湾口部と外洋に区分される。各水域はそれぞれの環境特性に応じて、異なった魚類群集が見られ、また、それぞれの魚類は季節的な移動回遊様式に基づいていくつかのグループに分類する事が出来る。さらに、伊川津周辺では遺跡をはさむ石神谷・江比間谷に小河川が集中しており、周囲約 15 km²の降水を集めて遺跡の前面で三河湾に注いでいる。このことは淡水(Freshwater) が確保できるということなので、生活環境の構築という点で重要な要素として留意すべきであろう。

一方で内水面から海に目を転じてみよう。まず、三河湾内を潮間帯(干潟・岩礁・転石海岸)・沿岸浅海帯・湾中央部というように分けて考えてみる。主たる特徴としては、渥美半島西部の潮汐の干満差は大潮時に最大 1.6m 前後であり、干潮時には福江湾内及び三河湾岸に干潟が形成され、また、福江湾は砂泥浅海で大潮干潮時には大部分が干出し、そして、江比間より東側では水深のある波食海岸で、岩礁 砂礫性の混合海岸(転石海岸)が形成されるといった点が上げられる。江比間～小中山地先では、低潮線から水深 5～7m までの幅約 0.5～1.5km にわたって平坦な緩斜面が広がっているのだが、この海底地形は波浪もしくは潮流によってもたらされた砂礫による堆積地形と考えられる(沿岸浅海帯)。底質は砂～細礫が卓越するが、貝ノ浜地先では部分的な岩礁もあり、また、沿岸浅海帯にはアマモによる藻場の顕著な発達が見られる。さらには、江比間以東の侵食海岸では浅海帯は著しく

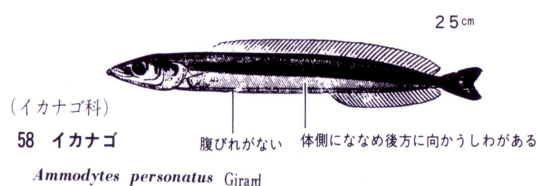
狭まり、底質も転石(暗礁)を交えるようになる。師崎水道沿岸及び太平洋岸では沿岸から急傾斜で水深が増すため、沿岸浅海帯は発達しないと考えられる。こういった水環境が何を意味するかはすでに自明であろう。後述するが、つまるところ、浅い水深(最深部で-20m)と狭い湾口という三河湾の地形条件は、海況や魚類相を特徴づける重要な要因となっている。既に述べたことであるが、湾中央部は平坦な海底の所謂「平場」で砂~泥質の底質であり、一方で三河・伊勢湾口部では、三河湾内とは対照的に、複雑な海底地形を呈し、底質も砂~岩礁が中心で、海況も内湾水・外洋水の影響を受けて複雑な様相を示し、多様性の強い水域環境が形成されていることを特徴としてあげることが出来るであろう。

2. 漁業生物環境論

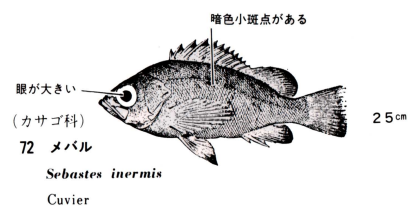
伊川津遺跡を取り囲む環境のひとつとして、漁撈生業を支える環境の一つである漁業生物についてみていきたいと思う。ここで取り上げられる問題は、生業構造の特性を考える上ですぐれて重要な意味を持つと考えられる。故に、以下では三河湾を中心とした伊川津周辺地域の漁撈対象生物についての素描が試みられる。

湾奥部に発達した河川と浅海地形、そして狭い湾口は、高温・高かん外洋水塊の侵入を阻み、河川水起源の低かんな湾内水塊の形成と卓越をもたらした。このことは、三河湾の生物が基本的には汽水性・内湾性の魚介類を基本とし沿岸性のもので構成されている生物学的立地条件を根本から規定した。実際、三河湾および愛知県近海において食用とされる海洋生物種はおよそ 100 種内外と考えられており、このことは当然ながらこの地に暮らし生業を海に頼らんとする人々の行動、いわばハビトゥスを規定するのである(中島 1980)(日本海洋学会沿岸海洋研究部会 1985)(船越 1981)。

ところで、湾が浅いということは、水温の季節変化を大きくし、他方で外海との間に生ずる水温変化の年周期・変動幅の相違は生物の産卵・索餌・越冬などの回遊時期や湾内・湾外への移動時期を規定する。即ち、先に見たように三河湾の表層の水温は 2 月と 8 月の両極を軸に約 3~30 の範囲の大きな季節変化を示すが、6~9 月の水温は湾内の水温が高く、10~5 月は逆に外海の水温のほうが高いという現象が見られる。その結果、水温差のなくなる 5~6 月と 9~10 月は多くの生物の産卵・索餌のための湾入時期と越冬のための湾外への移動とそれぞれ対応する。水温の最も低下する冬季には、三河湾の多くの生物は既に湾内外の深場へ越冬のために移動しており、湾内にはイカナゴ・アイナメ・メバル・カレイなど北方冷水性魚類の仲間がわずかに卓越するのみだ。しかし、水温上昇の始まる春には多くの生物が産卵・索餌・生育のために来遊し、生物相は豊かになる。こうした生物の季節的移動は、既に述べたように、人々の漁撈形態の季節的变化にも反映されるのである(中島 1980)(船越 1981)。



(図 8¹²)



(図 9¹³)

こうした生物学的立地条件が現実維持されていくためには、干潟をはじめとした遠浅地形や藻場・底質などのいくつかの無機物的環境条件が必要であり、それは三河湾とそこに住み着いた生物たちにとって、こうした環境条件は彼らの再生産と生活の中に取り入れられ、いつしか不可欠のものとなった。換言すれば、「三河湾の形成史は生物自身の生い立ちそのものであった」(船越 1981p.91)のである。

加えて、三河湾は河川と浅海地形がよく発達しているが故に、豊富な栄養塩類と十分な日照により一次生産はきわめて高く、動植物プランクトン、ベントス等の魚類を始めとした海産生物の餌も豊富である。中でも沿岸域に発達した干潟や藻場など最浅部の生産力湾中央の平場の約 20 倍ともいわれ、こうした最浅部は幼稚仔の大型捕食者からの隠れ場としての機能も兼ね備えていることから、三河湾及び周辺海域の大半の生物の再生産の場となっている(船越 1981)。

それでは、具体的な漁業生物についてみていきたいと思う。三河湾での魚類・貝類を中心とした主たる漁獲対象生物を図 10 に示してみる。

魚 類	コノシロ	マイワシ	カタクチイワシ	マサバ
	マアジ	ヒイラギ	スズキ	クロダイ
	シマイサギ	キビレ	マダイ	キス
	マアナゴ	ボラ	アユ	ウナギ
	マハゼ	メバル	タケノコメバル	クジメ
	アイナメ	マゴチ	ヒラメ	マコガレイ
	イシガレイ	メイタガレイ	クロガシラカレイ	ウシノシタ
	カワハギ	ギマ	コショウダイ	ツルマキ
	マエソ	サヨリ	イシモチ	アカエイ
	ムツ	ヤマトカマス	アカカマス	マルアジ
	ブリ	カンパチ	ヒラマサ	イシダイ
	テンジクダイ	コトヒキ	イボダイ	イシガキダイ
	ヘダイ	キュウセン	ネズッコ	アイゴ
	ギンポ	ウマズラハギ	トラフグ	サバフグ
	メジナ	ヒメジ	ホウボウ	
	貝 類	ヤマトシジミ	タイラギ	イタボガキ
アカガイ		ミルクイ	オニアサリ	
トリガイ		バカガイ	ツメタガイ	
サルボウ		ウチムラサキ		
アサリ		イタヤガイ		

(図 10¹⁴)

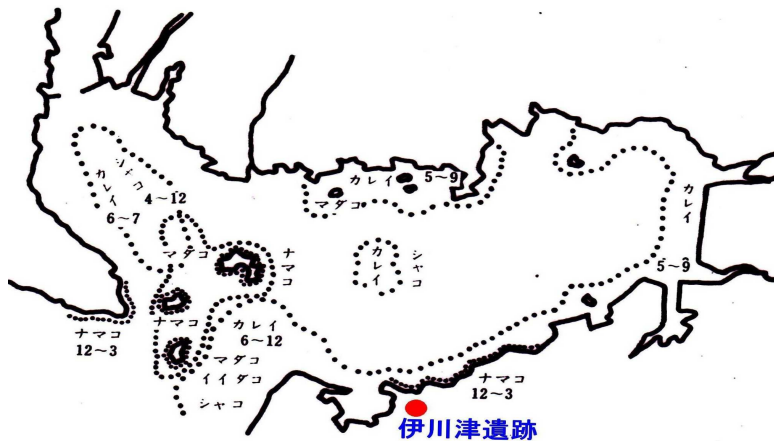
ところで、現在でもこの三河湾岸では種々の漁業が行われているが、船越茂雄によれば、その漁業と漁獲対象がバッティングしており、それによって各種の漁業のいずれかにおいてなくてはならない漁獲対象物がわかるとのことである。つまり、三河湾の重要漁業生物が抽出できるということなのである(船越 1981)。そして、抽出された漁獲生物は次のようなものである。魚類・貝類・甲殻類を取り上げてみる。

魚類：イシガレイ・マコガレイ・スズキ・ボラ・マアナゴ・クロダイ・マイワシ・カタクチイワシ・イカナゴ・マサバ・マアジ・コノシロ・サワラ・コチ・シ

- ロギス・サヨリ・ギマ・ヒイラギ・アイナメ・メバル
 貝類：アカガイ・トリガイ・サルボウ・アサリ・タイラギ・ミルクイ・バカガイ・
 ウチムラサキ
 甲殻類：クルマエビ・アカエビ・ヨシエビ・サルエビ・シバエビ・ガザミ・イシガ
 ニ・シャコ

そして、以上の重要漁業生物たちは、種の形成期や定住期における三河湾とのかかわりあいの度合いの程度によってさまざまな生活形態を獲得してきた。そして、前述の船越茂雄に従えば産卵という再生産過程において最も重要な点に注目すると、その生態は次のように整理できるという(船越 1981)。このような視点の導入はすぐれて重要であるように思われる。取り扱っているのは現在ではあるという制約はあるものの、伊川津遺跡研究のひとつの参照枠として、考古学的に得られたデータと摺り合わせるための参照枠としてこの成果を活用するのは、さしあたり不適當とまでは言えまい。従って、一瞥しておくためにも、以下に要点をまとめてみた。

まず、一生を三河湾で生活し、そのため環境の改変の影響を最も受けやすいグループを「生



生態区分 [A] の生物の漁場 (カレイ類, マダコ, イイダコ, シヤコ, ナマコ) (図 11-1¹⁵)
 カレイ, マコガレイ, イシガレイ

態区分 A」(図 11-1, 11-2)とする。イシガレイ・マコガレイ・アイナメ・メバル・アカガイ・トリガイ・タイラギ・ミルクイ・シャコなどが相当する。



生態区分 [A] の生物の漁場 (貝類) (図 11-2¹⁶)

次に産卵場・成育場とも湾内であるが秋になると越冬のため湾内から去り、故に生活史全体での環境改変の影響は A のグループに比べれば低い、卵や幼稚子のときに影響を蒙

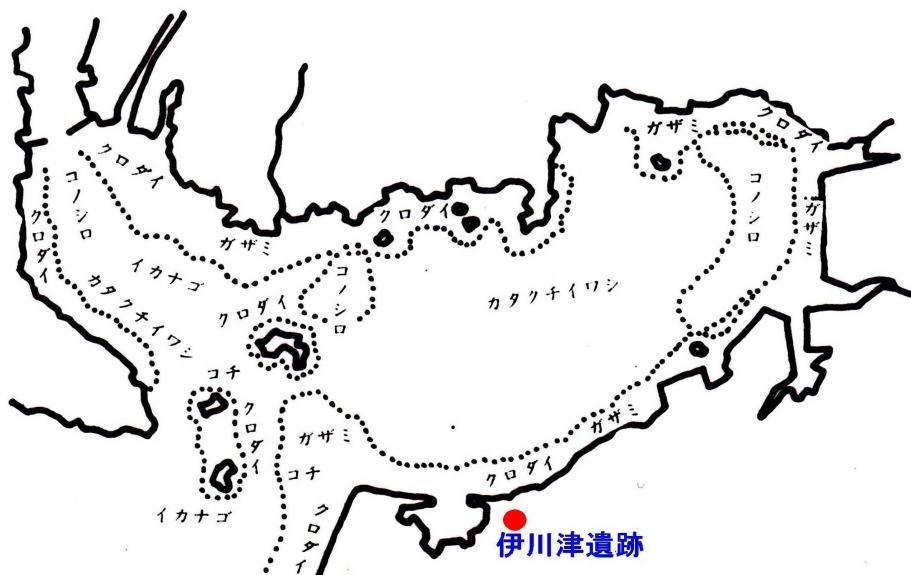


生態区分 [B-a] の生物の漁場

(図 12¹⁷)

ることが考えられるグループである。このグループを「生態区分 B-a」(図 12)とする。サヨリ・ヒイラギ・ギマ・シロギス・コオイカなどがそれにあたる。

続いて、産卵場は湾内から外海沿岸域であるが、成育場が多くの場合湾内でありつつ秋には越冬のため湾内から去るグループである。このグループは成育期に干潟を不可欠とす

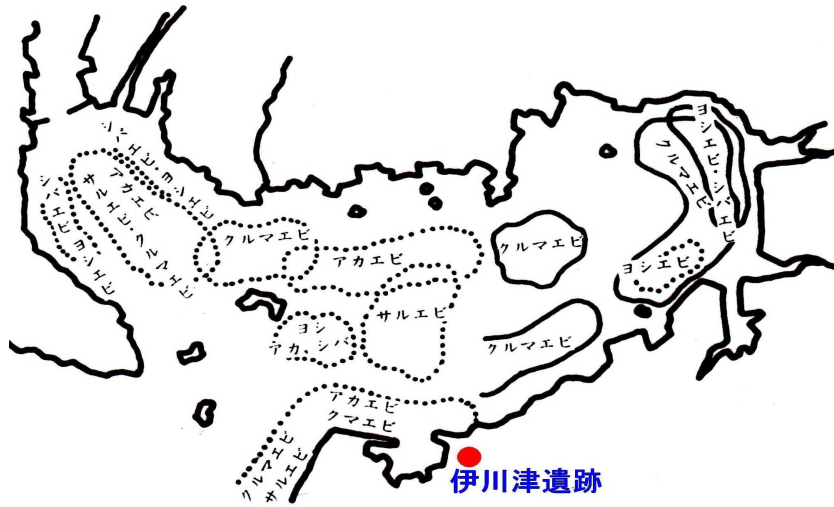


生態区分 [B-b] の生物の漁場

(図 13-1¹⁸)

るものがいるので、これらに関してはかなり環境改変の影響を受ける。このグループを「生態区分 B-b」(図 13-1, 13-2)とし、コノシロ・カタクチイワシ・イカナゴ・クロダイ・コチ・クルマエビ・アカエビ・ヨシエビ・サルエビ・シバエビ・ガザミなどが含まれる。

産卵場は外海であるが、成育のため湾内に来遊し、秋には越冬のため去っていくグループがある。このグループには表中層を生活の場所とし遊泳力のある魚種が多く含まれているので、環境改変の影響は直接的には蒙りにくい。これらを「生態区分 C」(図 14)とし、



生態区分 [B-b] の生物の漁場 (エビ類, シヤコ)
 (注) 実線は昭和10年当時の渥美湾の漁場
 今では、ほとんど失われてしまった。

(図 13-2¹⁹)

スズキ・ボラ・マアナゴ・マイワシ・マサバ・マアジなどが含まれる。
 そして最後のグループとして、産卵場も成育場も外海であるが、生活史の一時期に湾内



生態区分 [C] の生物の漁場

(図 14²⁰)

に来遊するものがある。これを「生態区分 D」として、含まれるものとしてサワラなどが挙げられる。(船越 1981)

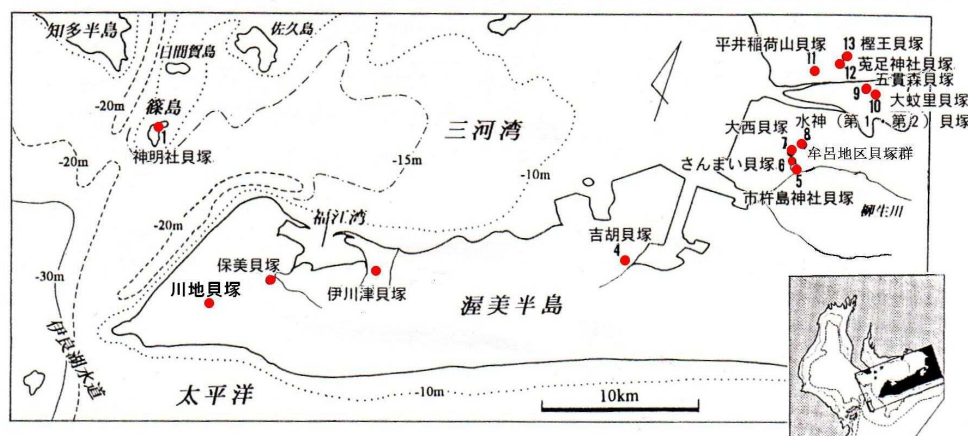
このように指摘された事実は、伊川津遺跡の遺物から往時の人々の生活状況や生業構造を考える上で重要な示唆をもたらすと考えて差し支えないであろう。

3.伊川津遺跡研究略史

ここで、伊川津遺跡に関しての研究史について、簡単に眼を配しておきたいと思う。こ

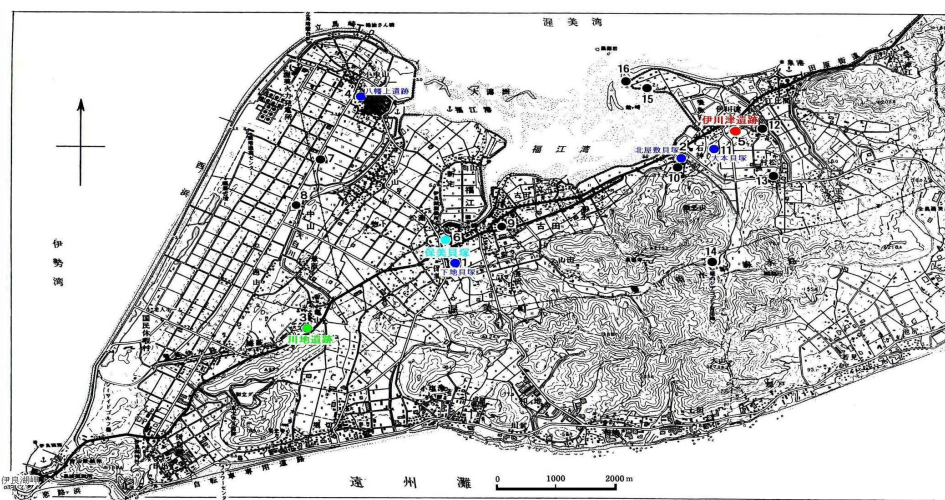
れまでの記述は、伊川津遺跡を環境という方向から浮き彫りにするような視点を獲得せんと試みたものであった。そして、ここからの研究史は、上記の記述に対して時間的／歴史的な視点を得んとする試みであり、それによって伊川津遺跡の姿をより浮き上がらせんとすることがここでは目指される。

渥美半島とその周辺域における縄文時代晩期貝塚の分布



(図 15²¹)

伊川津遺跡がある渥美半島は、史跡が多数存在することで有名である。貝塚だけに絞ってみても、伊川津をはじめとして、吉胡・川地・保美・大本・石神平野・青山・貝の浜などが存在し、時代的にも縄文から古代に至るまで、また貝塚だけでなく奈良・平安時代の窯業遺跡(古窯址)も幅広く存在している。古より人々の活動が展開された豊かな地であることが偲ばれる証を現代にも伝えているのである。



(図 16)

渥美半島の遺跡を踏査した人々は明治以来数多く存在するが、最初期の人々の中に犬塚又兵・大野雲外の名を見つけることが出来る。1905年の『東京人類学会誌』に渥美半島に関する記述を見ることが出来る。後に伊川津研究史において重要な役割を果たすことになる清野謙次が1909年に渥美に遊んでおり、遺跡に関しての記述を『民族と歴史』誌に寄稿しており、その13年後に再び渥美を訪れ伊川津をはじめとする貝塚を踏査している。

ここで、清野について若干の説明を加えておこう。清野謙次は、元々は病理学者であり、1909年に渥美を訪れたときは京都帝大の医学部を卒業する年次にあっていた。考古学は

幼少のころよりの趣味であり、結果的には、病膏肓に入るではあるまいが、趣味が高じた拳句に京都の寺において窃盗を働き、その時就いていた京都帝大教授のポストから追われることになる。しかし、この医学からの追放が清野をして、出土人骨を通じての人類学的研究・日本人論研究そして貝塚研究²²に邁進させることとなり、彼の名を考古学史上に留めることになったのは運命の皮肉であろう。そして、彼の主要なフィールドのひとつが伊川津をはじめとする渥美半島であったのだ(清野 1969)(春成 1995)。

若干本筋から外れたきらいがある。元に戻ろう。清野以降にも、陸軍元帥・公爵大山巖の息子である大山柏が 1923 年に『人類学雑誌』に保美貝塚の報文を執筆したりしていた。その報文には、小金井良精と柴田常恵が伊川津で人骨を調査していること記されている。また、1923 年には清野謙次が宮本博人とともに吉胡貝塚で古人骨を収集している。

ここで、渥美全体から伊川津自身の調査研究の歴史に眼を向けよう。伊川津遺跡を初めて紹介したのは、先に名の拳がった大野雲外こと大野延太郎である。彼は伊川津について、次のように述べている。「村社の周囲に貝殻多く散布してある。其面積が広くあって余程有望な場所と思はれた。其当時格別珍らしきものは発見しなかった。土器、貝器等の破片・鹿骨貝器などは多く掘り出されました。然るに昨年に至って有髭土偶の首部を発見したのは矢張この貝塚である。」(報告書 p.17)と述べており、有髭土偶の発見をアイヌ・コロボックル論争への有力な証拠の発見として注目している。次いで、1922 年に清野謙次が伊川津遺跡を訪れている。彼の注目は出土人骨にあった。同年訪れた大山柏・小金井良精・柴田常恵らが訪れたが彼らの目を引いたのもやはり出土人骨であった。このあたりから、伊川津研究の中心は出土人骨を中心に展開されることとなった。特に、戦後にも受け継がれる流れのひとつでもある、所謂「抜歯」の習俗に関する調査が、伊川津の名を有名にしたとさえ言えるかも知れない。何しろ、教科書にさえ伊川津出土人骨は出てくるくらいであるのだ。反面、貝・獣骨・魚骨といった動物遺存体に目を向けた生業研究はまだこの時期にはメジャーであるとは言い難かった。日本考古学の黎明期において、大量に出土する人骨に耳目を奪われるのは致し方ないとも言えるであろう。ともあれ、生業研究への傾注には今暫くの時間が必要であった。その後、1936 年に鈴木尚・浦野治らが小児を含む人骨 37 体を検出した。翌年にも 24 体検出し、その中には明らかに外部からの傷害を受けた痕跡のあるものがあったことが注目された。

戦後に入り、伊川津遺跡の調査は 1949・50・57・59・84・92 に行われた。終戦直後のものは主として芳賀陽により主導された調査であり、調査の主眼も戦前からの連続性の上から出土人骨にあてられた。それでも、1949 年の調査で食物残渣への着目が見られるなど、戦前とは異なる着目点の萌芽が窺える部分もある。それでも、本格的な調査に対する視点のシフトは、1984 年の調査まで待たねばならなかった。84 年の調査では、動物遺存体に対して動物考古学という当時としては新しい分野の光が当てられることになった。西本豊弘を中心とした動物考古学の専門家が参加したのである。これは新しい流れであるといつてよいであろう。この調査以降、伊川津貝塚の動物遺存体から、当時の人々の生業に対する食料資源のサイドからの研究が本格化したのである。それでも、この地域を研究対象とした業績はそれほど多くはない。目だった研究者としては、伊川津遺跡を専らの対象とした論文を複数上梓している樋泉岳二(樋泉 1991・1993・2000)や、豊橋市地域も含めて研究を展開している岩瀬彰利(岩瀬 1997・2003)が目立つ程度で、お世辞にも活発であるとはいえ

ない。無論、日本の他の貝塚集中地域²³に比して、この地域の発掘自体が稠密さにかけてという致し方ない憾みがあることも事実であろう。見方を変えれば、伊川津遺跡をはじめとした渥美半島の生業研究はまだ緒に就いたばかりであるということも言えるであろう。

第2章 漁撈生業一般論

既に見てきたように、拙論において対象として遡上にあげられている貝塚遺跡である伊川津遺跡は、立地その他の環境条件から見ても、海との関わりが深いことについて確認することはできたかと思う。それを踏まえたうえで、生業問題について考察を加えるとき、ひとつのアプローチとして、漁撈それ自体について考えてみることに、換言すれば、漁撈の原理的問題についての考察が有効性を帯びてくるように思われる。無論、ほかのアプローチは無数にあるであろうし、それらの各方面からの批判も少なからずあるであろう。とはいえ、先史時代の漁撈を考える上で、何も視点を特定のひとつのものだけに限定しなければならない必要性に首肯するには些か躊躇を覚える。先史漁撈を考える上で、これから議論されるであろう、民俗(族)学や歴史時代の記録からの漁撈に関しての議論を提示することを間違いと断ずる前に今一步踏みとどまってみることは、あながち無駄ではあるまい。そこで、本章では漁撈原論とも言うべき議論が展開されることとなる。

1. 漁撈原論

在野の考古学者として著名で、実験考古学における実践的パイオニアひとりである楠本正助は、漁撈と漁具について次のように規定/定義している。

「漁具を大別すると、突く・釣る・すくうの三つに分かれる。」(楠本 1979 p.32)

当たり前すぎる規定/定義であるが、しかし、これらの範疇に入らない漁法があるかどうかは、寡聞にして聞かない。管見の範囲ではあるが、単純に技術論的に言えばこの楠本の規定/定義は、漁撈技術をほぼ普遍的にカバーできる規定であるように思われてならない。試みに、『日本漁具・漁法図説(増補改訂版)』(金田 1986)を繙くと、近代的な産業化されハイテク化された漁業技術においても、根底においては、楠本の規定/定義を外れることは無いように思われる。例えば、「鉞(harpoon)」という道具があるが、これなども縄



(図 17²⁴)



(図 18²⁵)

文時代から現代に至るまで用いられている漁撈具であり、手元から獲物に向けて「発射」されるという原理においては、縄文時代の人力による離頭鉞(図 17)も現代の火薬で発射する捕鯨用の鉞の間に本質的な違いはない。また、『日本古代漁業経済史』(羽原 1949)や『日本水産捕採誌』(農商務省水産局 1912)、『日本水産史』(日本常民文化研究所 1957)、『明治前日本漁業技術史』(日本学士院日本科学史刊行会 1959)等の漁業史関連の主要な古典的文献を渉猟しても、漁撈/漁業組織などについての变化などに関する言及はあるものの、楠本の規定/定義を覆す指摘を見出すことは、管見の範囲ながらも出来なかった。

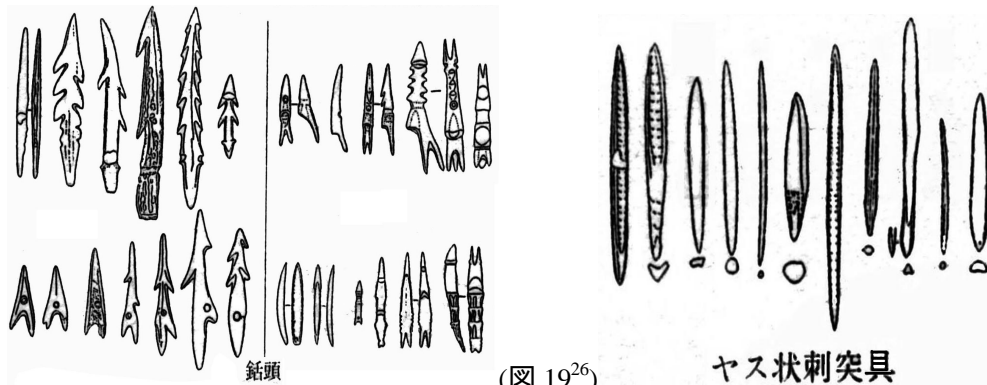
やや雑駁に過ぎる議論かも知れないが、漁撈においては、物質文化的な側面即ちハード

ウェアの面での変化というのは実は見た目程には無くて、むしろ変化はそれをを用いる人間の社会的関係即ちソフトウェアの面の方に顕著に見られるのではないだろうか。例えば、高桑守は、伝統的漁民の類型化に関わる研究において、その分類にあたって漁具・漁法を指標のひとつとして用いつつも、結局のところ民俗というソフトウェアを主要な分類枠として設定し、漁法・漁具といった物質文化／ハードウェアは、民俗に従属するもののように規定されている(高桑 1984)。また、卯田宗平は、漁撈活動における技術の問題を論じる仕事において、マイケル・ポラニーの「暗黙知」の議論を踏まえつつ、物質文化的な側面は「技能」「技術」という彼が規定したソフトウェアに従属するものとして規定している(卯田 2003)。この指摘は裏返せば、漁撈関係の物質文化の相対的な不易性の高さについての蓋然性を浮き彫りにしているとも考えられるのではないだろうか。

2. 漁撈民俗 刺突具を中心に

先に銚の例で簡単に示しておいたが、楠本が指摘するように、漁撈における基本的な「動き」自体は、時代を超えてある種の普遍性を獲得しているように考え得るに十分な蓋然性を有している。そこで、ここでは比較し易さを考慮して、漁具のうちで刺突具に関して、民俗例として遺存しているものを取り上げて、検討を加えていく心算である。そこでまずは、理解の基盤となる刺突具・刺突漁具についての基本的・原理的な事柄について、いくつか押さえておくことが必要であろうと思われる。

まず、代表的な刺突漁具である「銚」と「ヤス」に視点を当ててみよう。銚とヤスとの区別は、一般には手槍と投槍との区別に似て、すぐ目の前の獲物を、柄を手にしたまま直接突き刺して引き上げるものをヤスといい、やや離れた位置から、群がる獲物をめがけ



て、柄の先に紐を縛りつけたまま投げつけ、その紐をたぐり寄せて引き上げる、やや間接的なものをモリ(銚)と呼んでいる。つまり、ヤスは槍と同じ機能と形態を有するもので、漁具としてはもっとも初源的なものであったと考えられる(後藤 1988)。一方で銚は、原始的に人力でもって「投げる」か、時代が降って種々の人力以外のパワーを用いて銚を「飛ばす」かするものであるというように定義づけられる。端的にいえば、ヤスは直接人の手を介して獲物に「刺す」ものであり、銚は獲物に向けて「発射」するものであるともいえる。現在でも、ゴムを利用して飛ばすものを「銚」と呼び、手で直接刺すものを「ヤス」と呼ぶようである。そして前者の漁法を「投射刺突」と称し、一般に獲物に著しく近接できないかもしくは獲物が敏捷な場合に用いられる。後者の場合を「把持刺突」と言い、獲

物が近接しているかもしくは緩慢な動きのものの場合に使用される(金田 1986)

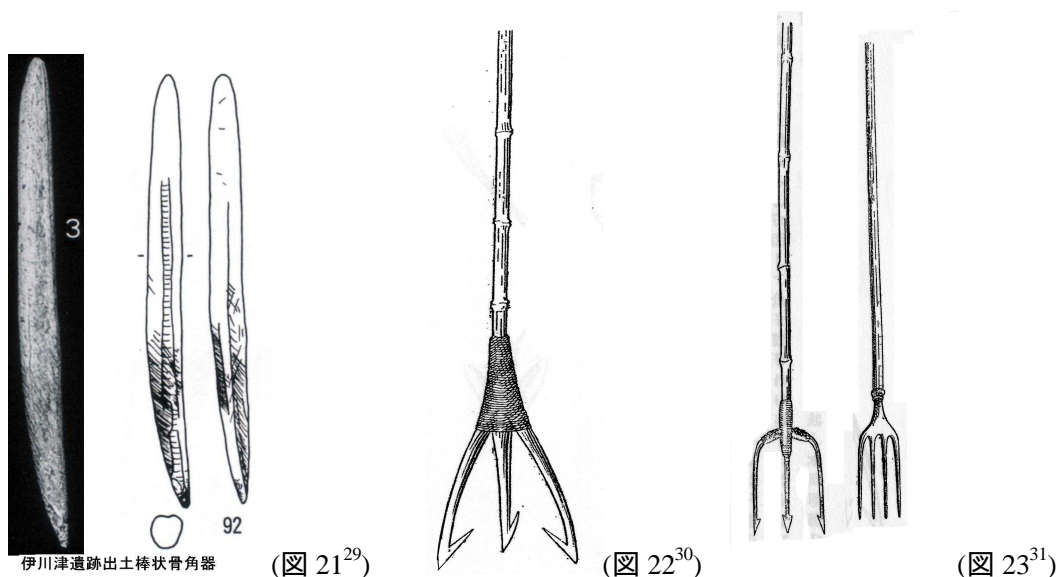
また、鋸が手から離れて獲物をコントロールし尚且つ回収しなければならないという点に着目し、「逆刺」つまり釣り針で言うところの「カエシ」の有無をもって区別のための目安にしようとする立場もある(江坂・渡辺 1988)。そのため、この立場をとると、考古遺物としてのヤスと見做される遺物の範囲が広がってしまい他の用途の可能性を排除する恐れがあるために、この立場に対しては慎重でありたいという向きも少なくない²⁸。伊川津遺跡の報告書において、報告者の西本豊弘は次のような傾聴に値する見解を述べている。

「刺突する道具のうち、棒状であり、シカの中手骨または中足骨で作ったものを棒状刺突具として一括した。計 291 点出土しており、当遺跡の骨角器の半数以上を占めている。しかし、破損品が多く、完存品は少ない完存品も大・小ささまざまであるが、先端部はよく磨耗しており、鈍くなっている。基部には線状の擦痕が明瞭に残っており、基部端が尖っているものとそうでないものがある。擦痕は器全体にみられることが多いが、先端は磨耗によって失われており、基部には明瞭に残っている。この特徴を主な基準として、破損品を先端部と基部に分類した。また、器全体が直線的なものと基部付近が若干曲がるものがあるが、シカの中手骨と中足骨の基部近くを使うか遣わないかの差であり(両骨端近くを材料とすると若干曲がることになる)それらを同タイプの刺突具と考え、区分していない。なお、このタイプの刺突具の用途については、一般にヤスなどの漁撈具の先端が考えられている。しかし、この刺突具の中には先端が著しく磨耗し丸くなっている例もあり、それらは魚を突き刺すことは困難と思われる。数本組み合わせて挟み獲るヤスとしての機能も考えられるが、ヤスとしては短いものが多く、木製の逆刺を着装した痕跡もみられない。いずれにせよ、出土量が多いことから、このタイプの骨器は生業に用いられたと思われるが、その用途は不明であると言わざるを得ない。なお、基部にタール等の接着剤が附着したものは見られなかった。さて、このタイプの骨器のほかの地域での出土状況をみると、縄文時代の各時期・各地域に出土しており、一般によく利用された骨器であることがわかる。しかし、このタイプの骨器がこれほど多く出土した遺跡は、これまでは知られていない。吉胡遺跡でも多く出土しており、このタイプの刺突具が多いことが、渥美半島の晩期の骨角器の特徴の一つといえる。そしてもうひとつ特徴的なことは、逆刺や結束部のない単純な刺突具は鹿角でも作ることができるにもかかわらず、当遺跡では鹿角製の単純な刺突具がまったく出土していないことである。すなわち、単純な棒状の刺突具はシカの中手骨と中足骨を利用したこのタイプの骨器に限られている。このように、器種と原材との関係が限定されているという特徴を、この骨器によってうかがい知ることができるのである。この特徴は、根挟みにもみられ、この遺跡の骨角器全体の特徴のひとつといえることができる。」(報告書 p.187)

また、西本の師匠筋にあたる金子浩昌は、ヤスについて、その原材料の骨の分析を通じての研究を通じて次のようなコメントをしている。

「ヤスは、漁具のなかでもっとも単純で基本的な携帯をもつものの一つである。縄文石器時代にも細い棒状の、一端を鋭利にした骨角器が数多く出土しており、それらの中には、現在見突具とよんで、「浅海を搜索、魚類を刺突する」ものによく似ているものがある。もちろん、現在のは「多くは金属の尖突なる先端を有し、また一度刺突せる目的物が、容易に脱落するこのないように、釣鉤の アグ に類似する逆鉤を有するもの」

を普通にみるが、縄文時代のものは骨角器で見る限りあまり多いものではなく、地域や時期によってかなり限定されたものらしかった。」(金子 1967)



西本は、伊川津遺跡出土の骨角製の「棒状刺突具」を、何らかの生業に用いられたであろうということまで指摘しておきながら、最終的な結論としては「用途不明」としている。「刺突具」と名づけておいて、最後に用途不明とするのは何とも歯がゆさを感じずにはいられないが、それは研究者としてのある種の誠実さからくる判断なのであろう。とはいえ、既に西本自身も「刺突」具と呼んでいる以上、何を「刺す」のかという点を考慮すれば、遺跡自体が海に臨んでいる立地であることから、これらの「棒状刺突具」がヤスである蓋然性は高いと言う以外にない。さらに言えば、それ以外に果たしていかなる使用法があるのであろうか。一方で金子は、この論文が書かれたのは60年代後半であると言うことを考慮に入れて、読み返すと既に民俗例への関心を示しているてんの先見性に容易に気づくだろう。

ここまでで、一通り刺突漁具としての銚・ヤスについて基本的な事項について確認することが出来たかと思う。続いて、本筋ともいべき、民俗例に見られる漁撈についてみていきたいと思う。

そこで、少し話が前後するくらいがあって恐縮ではあるが、漁業/漁撈における銚やヤスを用いた漁の位置づけを簡単に確認しておいてから本題に入ることとしよう。

『日本古代漁業経済史』(羽原 1949)・『日本水産捕採誌』(農商務省水産局 1912)・『日本水産史』(日本常民文化研究所 1957)・『明治前日本漁業技術史』(日本学士院日本科学史刊行会 1959)・『日本漁具・漁法図説(増補改訂版)』(金田 1986)等の漁業史関係の基本的文献や各種の民俗誌等を眺めてみて気づくのは、共通して刺突漁を基本的にマイナーなサブシステムとして位置づけていることである。特に、『日本水産捕採誌』(農商務省水産局 1912)や『日本漁具・漁法図説(増補改訂版)』(金田 1986)などは、刺突漁を特殊な漁撈活動として位置づけ、『日本水産捕採誌』などの記述は、近代化の途上ということもあり、ほとんど前代の遺物扱いの感すら覚えた。近代化への道を必死に駆け上がっている最中の近代日本において、魚を一匹一匹獲るような「効率の悪い」漁撈活動である刺突漁などにポジティ

ブな意味を見出す感覚は時代的になかったのであろう。

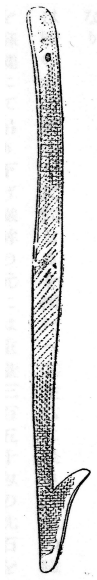
日本において、漁業が文字どおりの「産業」になったのは、近世以降すなわち江戸時代に入ってからであると言ってよい(二野瓶 1965)。冷蔵技術が未発達な時代において、漁撈が漁業として「産業」になるには限定的な流通ではあったであろう。この背景には、周知のように江戸時代を通じての猛烈な貨幣経済の進展があると言える。自給自足的な生活から商品経済への依存というひとつ社会経済史的なパラダイムの転換が近世日本には出現したのである。漁業関連で見ると、綿花生産と肥料としての干鰯の関係が象徴的であろう。「足が早い」魚であるイワシは冷蔵技術のない時代にはその商品としての価値は著しく低くならざるを得なかったが、綿花生産の勃興と木綿需要の高まりという近世の経済状況において、綿花栽培のための肥料(金肥)としてのイワシの価値が出てきたのである。そこで、九十九里浜では産業としての地曳網によるイワシ漁が始まったのである(二野瓶 1965)。

では、近世以前、中世はどのような状況だったのであろうか。このあたりは網野善彦の中世史研究の業績に詳しい。それを端的にまとめるところである。鎌倉初期のころまでは、漁業はなお独立した産業としてでなく、塩業・交通運輸業などと未分化の状態にとらえられていた。多少とも漁業生産に深く関係したと思われる人々の場合、共通して、一般の百姓とは区別された呼び方がされている。そこには現実的な根拠があったと考えられる。平安後期から鎌倉初期にかけて、漁撈に巧みで、船を自在に操り、製塩の技法を身に付けた人々の集団 おそらくは、色濃く血縁的な性格をもつ集団がなお定住することなく移動する姿が窺える。彼らは、津・浦に出入りし、ときに「旅網」として姿を現す。中世初期の彼らの実態は、その呼称に関わりなく、耕地・網等を保有せず集団としてあるいは個人として売買譲与の対象となっている場合、耕地生産手段を持ち、独自の集団をなして定着している場合、特殊な特権を与えられて広範囲に活動している場合の三段階に分けて考えられる。中世の漁業が、塩業・廻船業、さらには商業とも未分化なまま、主としてこれらの人々によって担われたのである(網野 1965)。

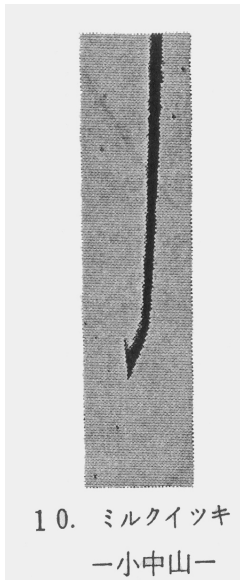
中世においては既に網漁の卓越が窺えるようであるが、刺突漁はどのようなポジションであったのであろうか。伊川津遺跡の形成された縄文時代はむしろ漁撈といえば刺突漁が中心だったと言ってよい。少なくとも発掘された資料からすればそう判断せざるを得ない。各地で「漁網錘」といわれる有溝の石器や土器片が出土していたり(渡辺 1973)、鹿角製の網針の出土(楠本 1980)が報告されたりとその蓋然性は決して低くはないが、それでも刺突具が重要な役割を果たしたことに変わりはないだろう。そして、その刺突漁伝統を受け継いでいると考えられるのが海士/海女である。即ち潜水漁を生業とする人々である。この海士/海女の問題については、田邊悟が精力的に研究(田邊 1990,1993)を蓄積しており、詳細についてはそちらに譲るが、ひとつ拙論に係る指摘をしておくとして、海士/海女がやはり伝統的に刺突具特に銚を使用してきたという点であろう。さらに興味深いのは、中国等の史書(『三国志』魏志倭人伝)にも日本の海士/海女が登場するのである。そしてその中で日本の海士/海女たちが刺突漁をしていると描かれているのである。しかも、銚は海士即ち男だけしか用いてはならないとなっているのだ(田邊 1993)。兎に角、刺突漁の伝統がかなり遡れることは確かであろうし、さらに、拙論において舞台となっている伊川津遺跡と三河湾沿岸は古来より海士/海女とゆかりの深い地でもある³²。

さて、ここでもう少し具体的な刺突具の検討に入ろう。三河地方～渥美半島にかけての

地域は、近代に至るまで網漁が主体だが、一方で近代以降廃れたと思われる刺突漁の伝統が豊橋～渥美半島一帯に残存しており、その道具類も各種伝えられている。また、視点を広く伊勢湾全体に、先に取り上げた海士／海女の存在に象徴されるように、潜水漁の伝統があつく存在することとも無関係ではあるまい。では具体的な道具をいくつか見ていこう。旧渥美町(現田原市)小中山付近では、船の舷側から水眼をもって海底を見ながらミルクイ(ミルクイ)やニシ類³³を突く「フシ」³⁴と称する刺突具が存在する。ミルクイ突きのフシ(図 24・25)は鉄製のフシとされている部分の長さ約 1.5m で先端に刃がついており、鉤がある。ニシツキのフシ(図 26)もミルクイ突きと同じではあるが、フシの先端が二股に分かれている。(愛知県教育委員会 1969)

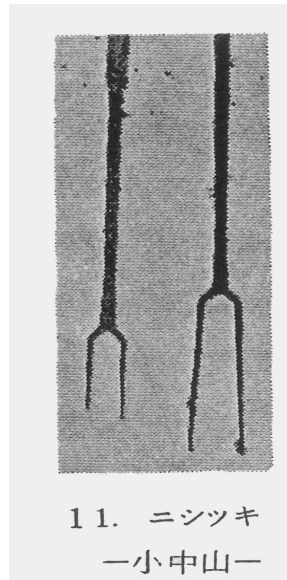


(図 24³⁵)



10. ミルクイツキ
—小中山—

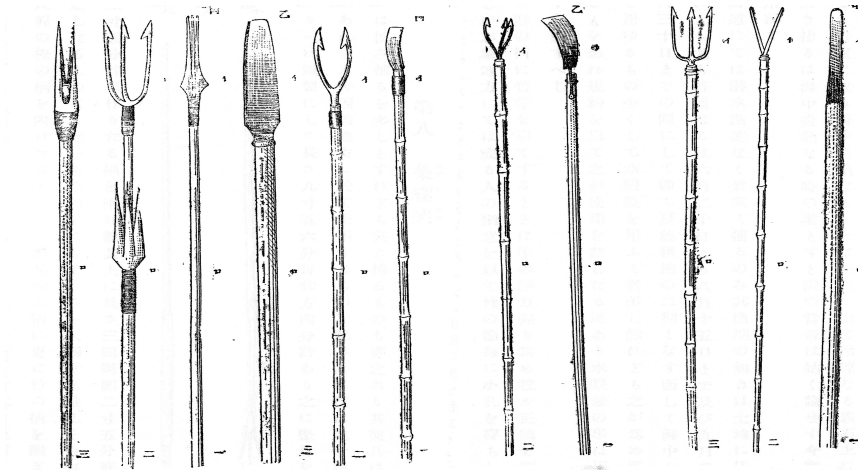
(図 25³⁶)



11. ニシツキ
—小中山—

(図 26³⁷)

また、これら以外にも、アワビを突くための「アワビツキ」(図 27)なる道具があり、これは『日本水産捕採誌』によれば、全国にまたがって存在する道具であるという(農商務省水産局 1912)。使い方としては、北方では専ら夏に用い、それ以外は専ら冬に用いるという。その理由は先述の海士／海女と関係している。海士／海女の主たる獲物の中にアワビがあるからである。つまり、夏場は、海中に潜って採れるが、冬場は寒さゆえに潜れずまた、海水が透明度を増すので突くのに都合が良いということである(農商務省水産局 1912)。



(図 27³⁸)

以上、本章において、われわれは刺突具を中心に、民俗例だけでなく歴史的背景も加味しつつ、伊川津遺跡における往時の生業活動を考えるための参照枠となりうる事実について検討を加えてわけだが、この企てが果たして伊川津遺跡における生業活動のより深い理解への一助と成り得ていることを祈念しつつ、本章に関してはここでひとまず筆を擱きたいと思う。

第3章 伊川津生業論

本章においては、前章との摺り合わせおよび齟齬の確認を念頭に置きつつ、遺跡の事実について簡単に確認を加えていきたいと思う。主として漁撈生業の季節性と特色について、隣接する遺跡も適宜参照しつつ「伊川津遺跡」がいったい何であるのか、浮き彫りにすることを目指しと検討を加えていきたいと思う。

1. 生業の季節性。

伊川津遺跡を舞台に活動していた縄文時代人は、自分たちの食料供給を自然に依存する、言い換えれば自然から獲得しなければならぬ狩猟(漁撈)採集民(hunter-gatherers)であったことは紛れもない事実である。ゆえに、彼らの生活は当然のことながら彼らを圍繞する自然/資源環境に左右されることとなる。となると、彼らは生存のために、ある程度は戦略的(strategic)に振舞わねばならないことになる。食料獲得を目的として行なわれる様々な活動は、対象となる資源の時間的・空間的構造や生態的・形態的特性に応じて、それぞれに特有の季節スケジュール、活動領域、獲得技術などの諸側面から構成される枠組みを持つ。そして、それらの諸活動およびその諸側面が相互に密接な関連を持ちながら、全体として一つのシステムを形成しているものと考えられるのであり、それはまた彼等の文化的・社会的な性格を理解することとも等価であろう(樋泉 1991)。そこで、本章ではさしあたって季節性を論ずるうえで、小池裕子による貝殻成長線分析に拠っている樋泉岳二の分析(樋泉 1991)を基本線として参照しつつ議論を進めていこうと思う。

ここでの分析の手続きは、簡単に言ってしまうと、コラムサンプルから得られた各レイヤーのアサリを成長線解析にかけ、それによって得られた季節と、各单位層に共存する他の動物遺存体の季節性との摺り合わせを行なおうというものである。

まず、魚類がその季節ごとに三つに分けられた。夏・冬・それ以外という感じである。その結果、夏季を中心とするものとして、クロダイ属、ボラ科、スズキ属、フグ科、ウミタナゴ科、フサカサゴ科(かなり多種にわたる)、アイナメ属、(エイ目、カレイ科)?等がまず挙がってきた。続いて、夏季を中心とするが、秋～春の間にも集中的な漁獲の行なわれていた可能性のあるものとして、ウナギ属が見出された。そして、最後に秋～春の間に盛期があるのだが、他の季節にも漁獲の行なわれていた可能性があるものとしてニシン科の魚が挙がってきたのである。そしてそれぞれを、前から 群・ 群・ 群として分けられそれぞれの特徴は次のように占めされる。

まず 群は、漁場は沿岸浅海域で、捕獲季節にまとまりをもつ 群魚類はその漁場についても共通している。体長組成が 10～20cm のものがその大部分を占めることから何らかの網漁が行われていた蓋然性がある。また、漁獲適期は、クロダイ属・スズキ属およびボラ科の魚類は夏期が実際の漁獲期となっているが、それはその漁獲適期である春～秋の範囲に収まるので、生態に一応は適応した捕獲季節パターンであるといえる。一方、ウミタナゴ科、フサカサゴ科、アイナメ属、カレイ科は、冷水選好種であるため本来は夏期が漁獲適期とはなりにくいのであるが、実際に上記の魚類と同様に夏期を捕獲期としているので

あるのは、その捕獲技術が網漁であるため、主たるターゲットである上記の魚類に付随して“雑魚”としてついでに捕獲されたと見る事が出来る。そしてあくまで、網漁であったという仮定の下でのみ成り立ちうる論証であることには注意が必要である。網漁以外の漁獲技法の可能性も捨て切れない。樋泉も、25cm以上のタイ・スズキの類いの魚類の網漁以外の独立した漁法(刺突漁?)の可能性を否定できないことを指摘している。沿岸浅海帯での漁撈の季節スケジュールは基本的にクロダイ・スズキなどの生態に適応したものであり、また、実際の獲得期間は獲得適期(漁獲適期)の範囲内でさらに短期間に限定されたものであり、それは換言すれば潜在的に利用可能な資源(獲ろうと思えば獲れる)が必ずしもフル活用されていないということであろう。

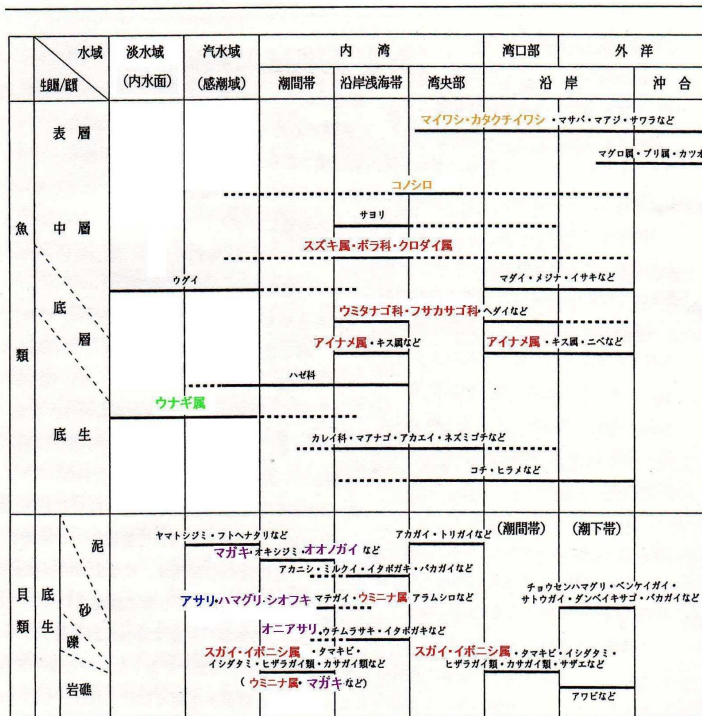
次の、第 群のウナギ属の生態分布は内水面を中心としており、他の魚類と大きく異なっている。また、貝層中からの出土傾向や季節性では 群魚類との類似性を示しつつも一方では特有のパターンも認められた。従って、特にウナギの捕獲を目的とした独立の漁法が確立していた可能性は高い。

そして、 群は、ニシン科が該当魚類となるが、その中で三河湾での生息が普通に見られる魚種は、マイワシ・コノシロなどである。いずれも、湾内での分布は湾中央部を中心としており、漁期・漁場ともに 群魚類と異なる。このことからイワシ類の漁獲にはその捕獲に適した独立した漁法があったと推定される。マイワシ・コノシロが湾内に生息するのは4~12月で、1~3月は湾外へ移動する。これに対してその漁期は、通年に及んだ可能性が強いものの、基本的には特に秋~春の期間内に盛期があったと推定されている。従って、イワシ類の漁獲期はその回遊サイクルに適合したものとはいえない。それまでの事例では、長期間の適期のそのなかに短期間の漁獲期が存在する構造であったが、今回はズレの幅は大きくかつ性格を異にする事が注目される。つまり漁獲期の大部分が湾外へ回遊してしまう時期にかかるということである。また、マイワシは12~7月に沿岸で産卵し、水温が低下すると南下(湾外の外洋に黒潮が流れているから湾外に出る可能性は十分にある)する。ウルメイワシは4~6月に内湾に回遊して産卵すし、コノシロは内湾に生息し、4~6月に産卵する。

しかし、第 群に関しては、ここで利用適期と実際の捕獲期との間にズレの可能性を指摘できるのであるが、その説明として次のような可能性をあげることが出来るかもしれない。捕獲が最も容易であったと考えられる夏期が相対的に低調となり、強風と波浪のおそれのある秋~春それもなかならず冬期に漁期がある。それはつまり、イワシ類の漁獲は資源の分布状況及び作業環境(気候・海況)の両面でむしろ条件の不利な時期を中心として行なわれている。このことは、イワシ類の漁獲期が単なる技術的な難易度によって決定されているのではないことを示している。ではなぜそのようなことをするのであろうか。可能性としては、イワシ類のなかでもマイワシ・コノシロなどは春(3~6月)を産卵期とし、その前年の秋~冬が最も「脂」が乗る時期でもある。こうした資源の栄養条件が漁獲期の決定要因となっていた可能性がある。また、イワシ類が単なる食料資源でなかった可能性がある。食料資源以外の何らかの特有な資源的価値を持っていたものと推測である。イワシ類を油脂原料として用いることは近世まで各地で一般的に行なわれていたことである。また、北西海岸インディアンの間では油脂原料として小魚(ooligan または eulachon キュウリウオ科の魚)の頻繁な利用が広く認められ、採取された油脂は調味料・薬用・儀礼用などの

目的で用いられる。

そして以上の得られた結果は次の図にまとめることができる。

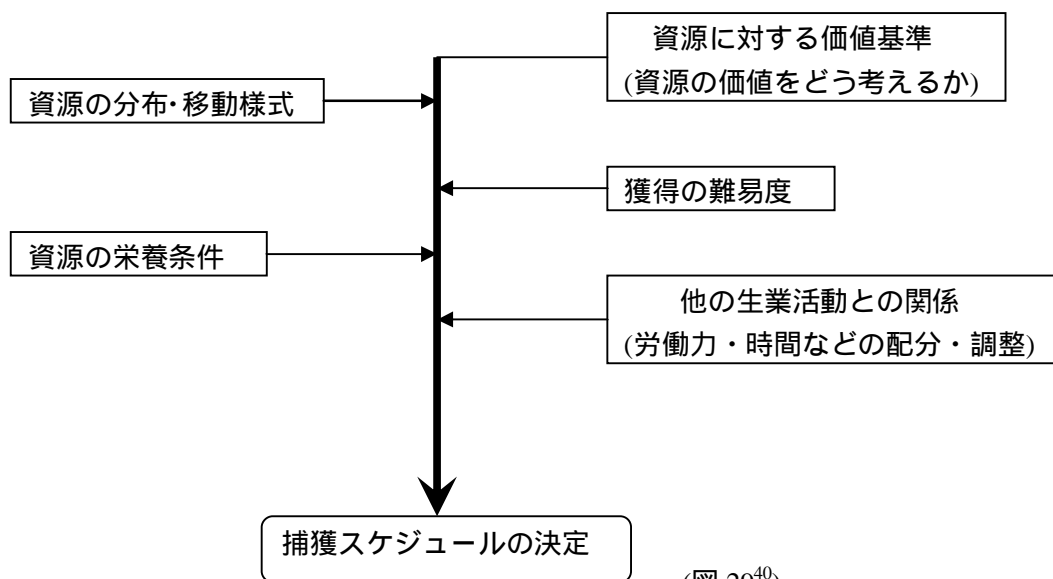


三河湾およびその周辺における主要貝類・魚類の分布水域模式図 (回遊魚については湾内来遊期の分布を示す) (図 28³⁹)

そしてさらに、第3群によってわかった疑問点が、齟齬が人間の文化的な原因に求められることが出来るのかもしれないというある種の皮肉に近いものであり、そのことはまた、樋泉によればのような模式図にまとめられる。

<資源的要因(環境要因)>

<文化的要因>



(図 29⁴⁰)

終章

以上にわたって、伊川津遺跡をひとつのサンプルにその環境適応および生業構造の特性を見てきたわけだ。結論めいたことを述べる事が出来るかどうかは、甚だ疑問ではあるが、ひとつのファインディングスめいたこととして、第2章で指摘したように、一見大きく変わっていったように見えることでも、その実本質的なことではさしたる変化はなく、非常にサステイナブルであるということであろう。漁撈技術が、楠本政助が示した原則を縄文時代以来ほとんどはみ出てこなかったということは、留意すべき重要なことではなからうかと思う。

また、今回の拙論において、理論的な側面からの検討と、サケ類遺存体が出土している伊川津遺跡に対してサケ・マス論からのアプローチが出来なかったことは、些か憾みとして残る部分ではある。所期の目的に届かなかった己の不明を愧じるとともに、次の機会に捲土重来を期したいと思う。

¹ 当遺跡の以下における基本的なデータに関する記述は、研究史も含めて、特に断りのない場合は、引用を除いて、既に刊行されている発掘報告書(伊川津遺跡発掘調査団 1988)(伊川津遺跡調査会 1995)に依拠しているものとする。それ以外の参考文献はその都度明記されるものとする。

² (日本第四紀学会 1987)を改。

³ 一般には現海面比+2~3mであったとされる。そのため、海岸線が現在から見るとかなり内陸部へと入り込んでいたと考えられる。地理学者の東木龍七が 1926 年に発表した論文において、関東地方の貝塚分布を地図上にプロットすることにより往時の海岸線の復元を試みたのがこの問題に関しての嚆矢である(鈴木 1989)(日本第四紀学会 1987)。

⁴ (愛知県史編纂委員会 2002 p.25)を改。

⁵ 三河湾沿岸における海進・海退に関しては(井関 1974)を参照。

⁶ (日本海洋学会沿岸海洋研究部会 1985 p.501)を改。

⁷ (日本海洋学会沿岸海洋研究部会 1985 p.502)を改。

⁸ (日本海洋学会沿岸海洋研究部会 1985 p.518)を改。

⁹ (日本海洋学会沿岸海洋研究部会 1985 p.524)を改。

¹⁰ 山論とは、入会地における入会権などをめぐっての村落共同体同士の争いのこと。山論絵図とはその争論の記録。

¹¹ (樋泉 1993 p.57)を改。

¹² (中島 1980 p.70)を改。

¹³ (中島 1980 p.84)を改。

¹⁴ (船越 1981 p.92)を改。

¹⁵ (船越 1981 p.99)を改。

¹⁶ (船越 1981 p.99)を改。

¹⁷ (船越 1981 p.105)を改。

¹⁸ (船越 1981 p.106)を改。

¹⁹ (船越 1981 p.106)を改。

²⁰ (船越 1981 p.108)を改。

²¹ (樋泉 2000 p.25)を改。

²² 清野には遺稿の集成として、日本全国の貝塚遺跡の情報を網羅した『日本貝塚の研究』(清野 1969)がある。

²³ 仙台湾沿岸域、東京湾沿岸域、そして三河湾沿岸地域が日本の貝塚密集地域といわれている(鈴木 1989)。

²⁴ 福島県薄磯貝塚出土、縄文晩期(『季刊考古学』第 25 号 1988 年)

²⁵ 現代の手鋸用の鋸先(<http://www.sonia.ne.jp/>)

²⁶ (忍沢 1988 p.48)を改。

²⁷ (忍沢 1988 p.48)を改。

²⁸ 三河湾口部の篠島にある神明社貝塚では、伊川津遺跡から出土したのと類似した骨角器の棒状で刺突用と思われる遺物が出土している。伊川津遺跡の発掘報告書ではそれらを「ヤス」とは呼ばずに「棒状の刺突具」と言うに留めているが、神明社貝塚の発掘報告書では明確に「ヤス」としている。この二つの遺跡は、三河湾を挟んでちょうど対面する位置関係にあり(図 15 参照)、第 1 章で触れた海洋環境条件を共有し生業形態も類似している(樋泉 2000)。

²⁹ 報告書より作成。

³⁰ 近世のヤス(農商務省水産局 1912 p.8)を改。

³¹ 近世のヤス 2 種(農商務省水産局 1912 pp.6-7)を改。

³² (田邊 1993 pp.39-43)を参照せよ。

³³ 巻貝一般のこと。螺のこと。

³⁴「ヤス」の異称として「ヒシ」という言葉があるが、「フシ」との関連性を容れる余地がありそうではあるが、真相は詳らかではない。(農商務省水産局 1912 pp.2-3)を参照せよ。

³⁵(農商務省水産局 1912 p.31)を改。

³⁶(愛知県教育委員会 1969 p.28)を改。

³⁷同上。

³⁸(農商務省水産局 1912 pp.26-27)を改。

³⁹(樋泉 1991 p.212)を改。

⁴⁰(樋泉 1991 p.225)を改。

参考文献

論文 / 単行本等

- 赤沢威 1969年 「縄文貝塚産魚類の体長組成並びにその先史漁撈学的意味 - 縄文貝塚民の漁撈活動の復元に関する一試論」『人類学雑誌』第77巻 - 4号 pp.36 - 58
- 赤沢威 1971年 「縄文時代の漁撈活動」 『海洋科学』 Vol. 3 pp.28 - 36
- 赤沢威 1994年 「縄文社会における季節性の克服」掛谷誠編『講座地球に生きる2 環境の社会化：生存の自然認識』pp.19 - 43 雄山閣出版
- 赤沢威 1989年 「縄文時代における漁撈適応の多様性」九学会連合日本の沿岸文化調査委員会編『日本の沿岸文化』pp.81 - 99 古今書院
- 赤星直忠 1962年 「横須賀市吉井城山第一貝塚調査概報(一)」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』第6号 pp.1-22
- 秋道智彌 1992年 「海の生態学 資源と漁撈」大林太良編『海と列島文化第10巻 海から見た日本文化』pp.147-188 小学館
- 秋道智彌, 市川光雄, 大塚柳太郎編 1995年 『生態人類学を学ぶ人のために』世界思想社
- 阿部芳郎 1996年 「縄文時代のなりわいと社会」『季刊考古学』第55号 pp.14-20
- 阿部芳郎 1996年 「食物加工技術と縄文土器」『季刊考古学』第55号 pp.21-26
- 網野善彦 1964年 「漁業」豊田武編『産業史 体系日本史叢書 10』pp.380 - 396 山川出版社
- 網野善彦 1985年 「古代・中世・近世初期の漁撈と海産物の流通」永原慶二・山口啓二編『講座・日本技術の社会史 第二巻 塩業・漁業』 pp.197 - 271 日本評論社
- 網野善彦 1999年 「中世社会における諸生業と流通について」『福大史学』66・67合併号 pp.25-40
- 網野善彦 1971年 「日本中世における海民の存在形態」『社会経済史学』36-5 pp.1-26
- 安斎正人 1996年 「考古学における構造変動論」『古代』第102号 pp.1 - 14
- 安斎正人編 2002年 『縄文社会論』上・下同成社
- 安斎正人 2004年 『理論考古学入門』 柏書房
- 安斎正人 1995年 『無文字社会の考古学(新装版)』 六一書房
- 安斎正人編 1999年 『用語解説 現代考古学の方法と理論』 同成社
- 安斎正人編 2000年 『用語解説 現代考古学の方法と理論』 同成社
- 安斎正人編 2000年 『用語解説 現代考古学の方法と理論』 同成社
- 池谷和信 1996年 「「伝統主義者」と「修正主義者のあいだの論争をめぐって - カラハリ・サン研究の事例 - 」『民博通信』 73 pp.64 - 77
- 井関弘太郎 1974年 「日本における2,000年B.P.ころの海水準」『名古屋大学文学部研究論集L』 史学 21 pp.155 - 176
- 市川健夫 1977年 『日本のサケ その文化誌と漁』 日本放送出版協会
- 伊藤正人 2003年 「愛知県における縄文集落研究の現段階」 関西縄文文化研究会編『関西縄文時代の集落・墓地と生業 関西縄文論集 1』pp.11 - 26 六一書房
- 伊藤嘉昭 1982年 『社会生態学入門：動物の繁殖戦略と社会行動』東京大学出版会
- 煎本孝 1977年 「房総海土、海女の潜水採集活動」 渡辺仁編『生態 人類学講座第12巻』 pp.297 - 312 雄山閣出版

- 岩瀬彰利 1997年 「干し貝の作り方」『三河考古』10号 pp.167 - 173
- 岩瀬彰利 2003年 「縄文時代の加工場型貝塚について - 東海地方における海浜部生業の構造 - 」関西縄文文化研究会編『関西縄文時代の集落・墓地と生業 関西縄文論集 1』pp.189 - 205 六一書房
- 牛沢百合子 1980年 「縄文貝塚研究史序説」『季刊どるめん』第24・25号 pp.49 - 74
- 卯田宗平 2003年 「漁撈活動における「技術」について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第100集 pp.25 - 45
- 梅沢太久夫 1982年 「縄文の集落 総論 - 研究史 - 」『考古学ジャーナル』No.203 pp.2 - 4
- 江坂輝彌・渡辺誠 1988年 『装身具と骨角製漁具の知識 考古学シリーズ13』 東京美術
- 大阪湾新社会基盤研究会編 1996年 『海域環境創造事典』沿岸域環境研究所
- 大島襄二編 1977年 『魚と人と海 - 漁撈文化を考える』日本放送出版協会
- 大野薫 2003年 「河内湾における先史漁撈関連資料の評価」関西縄文文化研究会編『関西縄文時代の集落・墓地と生業 関西縄文論集 1』pp.169 - 188
- 大野左千夫 1991年 「6 漁撈」石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編『古墳時代の研究 4 生産と流通』雄山閣出版
- 大林太良 1971年 「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』第2巻 - 2号 pp.3 - 81
- 大林太良 1971年 「先史社会組織復原の諸問題」『一橋論叢』第66巻 - 2号 pp.24-40
- 大山柏 1939年 「史前人工遺物分類 第二綱骨角器」『史前学雑誌』第11巻第4・5・6合併号 pp.1-162
- 岡本勇 1986年 「2 縄文先土器時代の食糧生産」近藤義郎・横山浩一・甘粕健・加藤晋平・佐原眞・田中琢・戸沢充則編『岩波講座 日本考古学 3 生産と流通』pp.33 - 56 岩波書店
- 小川岳人 2001年 『縄文時代の生業と集落：古奥東京湾沿岸の社会』（未完成考古学叢書；3）ミュゼ
- 小川英文 1998年 「考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ」『民族学研究』第63巻 - 2号 pp.192 - 201
- 小川英文 1999年 「東南アジアと日本の貝塚の比較」『季刊考古学』第66号
- 小川博 1984年 『海の民俗誌』名著出版
- 忍沢成視 1991年 「東北地方における骨角器文化の様相と展開 - 生産用骨角器の組成からのアプローチ」 滝口宏編 『古代探叢 - 早稲田大学考古学会創立 40周年記念考古学論集 - 』pp.179 - 207 早稲田大学出版部
- 忍沢成視 1988年 「縄文時代の生産用骨角器の在り方にみられる一般性」『古代』85pp.41 - 60
- 忍沢成視 1987年 「関東地方における骨角器文化の様相と展開」『月刊文化財』第290号 pp.18 - 24
- 加藤晋平 1981年 「旧石器時代の漁撈活動 - 先土器時代の経済活動を考える上で - 」『信濃』第33巻第4号 pp.1 - 12
- 金関恕・佐原眞編 1988年 『弥生文化の研究 第2巻 生業』雄山閣出版
- 金関恕・佐原眞編 1985年 『弥生文化の研究 第5巻 道具と技術 1』雄山閣出版
- 金子浩昌 1987年 「日本の骨角器」『月間文化財』第290号 pp.4 - 10

- 金子浩昌 1967年 「骨製のヤス状刺突器」『考古学ジャーナル』No.14 pp.15 - 19
- 金子浩昌 1968年 「鳥骨を材料とした刺突器」『考古学ジャーナル』No.21 pp.11 - 17
- 金子浩昌・忍沢成視 1986年 『骨角器の研究 縄文篇』慶友社
- 金子浩昌・西本豊弘・永浜真理子 1982年 「狩猟・漁労対象動物の地域性」『季刊考古学』第1号 pp.18 - 27
- 金田禎之 1986年 『日本漁具・漁法図説(増補改訂版)』成山堂書店
- 神沢勇一 1962年 「横須賀市吉井城山第一貝塚出土の骨角牙器・貝製品(一)」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』第6号 pp.57-68
- 神沢勇一 1962年 「横須賀市吉井城山第一貝塚出土の骨角牙器・貝製品(一)」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』第6号 pp.57-68
- 岸上鎌吉 1986年 「原始民族の水産食料」(初出1924)齊藤忠編『日本考古学論集5 生業・生産と技術』pp.2 - 5 吉川弘文館
- 清野謙次 1969年 『日本貝塚の研究』岩波書店
- 楠本政助 1979年 「縄文時代の魚とり - 刺突具の発展 - 」『自然科学と博物館』Vol.46 No.4 pp.32 - 37
- 楠本政助 1980年 『縄文生活の再現 実験考古学入門』筑摩書房
- 黒尾和久 1988年 「縄文時代中期の居住形態」『歴史評論』454 pp.9 - 21
- 甲元眞之 1994年 「東北アジアの先史時代漁撈」『文学部論叢』第45号 pp.135 - 158
- 小栗一夫 1985年 「縄文前期集落の構造 - 内陸部と海浜部の集落比較から」『法政考古学』第10集 pp.47 - 67
- 小島孝夫 1995年 「漁民の移動と漁撈技術の伝播」神奈川大学日本常民文化研究所編『神奈川大学日本常民文化研究所報告第18集 漁民の活動とその習俗』pp.144 - 156 平凡社
- 小杉康 1991年 「縄文時代に階級社会は存在したのか」『考古学研究』第37巻 - 4号 pp.97 - 121
- 小谷竜介 2002年 「鮭漁の現在 - 山形県鮭川の事例より - 」『東北歴史博物館研究紀要』pp.29-44
- 後藤明 1981年 「アラスカ周辺における先史漁撈技術の考察 - 釣針の分析を中心に - 」『考古学雑誌』第67巻 - 1号
- 後藤明 1991年 「仙台湾・三陸周辺の漁労民俗」宮田登編『海と列島文化第7巻 黒潮の道』pp.601-629 小学館
- 後藤明 1992年 「鮭漁 - 環太平洋的視点 - 」大林太良編『海と列島文化第10巻 海から見た日本文化』pp.189 - 220 小学館
- 後藤和民 1980年 「縄文集落と貝塚」『季刊どるめん』第24・25号 pp.34 - 48
- 後藤和民 1985年 「馬蹄形貝塚の再吟味 - 東京湾東沿岸における縄文集落の一樣相について - 」論集日本原史刊行会編『論集日本原史』pp.373 - 408 吉川弘文館
- 後藤和民 1982年 「縄文時代における生産力の発展過程 - 東京湾沿岸を中心として - 」『考古学研究』第29巻 - 2号 pp.42 - 58
- 後藤和民 1988年 「狩猟・漁労の技術と変遷」大塚初重・戸沢充則・佐原眞編『日本考

- 古学を学ぶ(2) <新版>』 pp.112 - 145 有斐閣
- 後藤和民 1983年「縄文集落の定着性について - 東京湾東岸の貝塚と集落を中心として - 」『千葉史学』第2号 pp.11-28
- ゴドリエ, M. / 山内昶訳 1986年『観念と物質 : 思考・経済・社会』法政大学出版局
- 小林達雄 1980年「縄文時代の集落」『國史學』第110・111合併号 pp.1 - 17
- 小林達雄 1984年「縄文時代領域論」國學院大學文學部史學科編『坂本太郎博士頌寿記念日本史学論集』上 pp.3 - 29 吉川弘文館
- サーリンズ, M. / 山内昶訳 1984年『石器時代の経済学』法政大学出版局
- 西條八束 2002年『内湾の自然誌 : 三河湾の再生をめざして』あるむ
- 酒詰仲男 1961年『日本縄文石器時代食料総説』土曜会
- 桜田勝徳 1959年「漁業」大間知篤三・岡正雄・桜田勝徳・関敬吾・最上孝敬編『日本民俗学大系5 生業と民俗』 pp.75 - 119 平凡社
- 佐々木高明 1991年『日本史誕生 集英社版日本の歴史』 集英社
- 佐々木藤雄 1975年「“縄文時代集落論”の現段階」『異貌』 弐 pp.17 - 29
- 佐々木藤雄 1982年「集落を通して縄文時代の集落を探る」『考古学ジャーナル』No.203 pp.5 - 9
- 笹倉いる美 1998年「サハリン・アム・ル川流域の魚食とその道具」『民具マンスリー』第31巻4号 pp.13 - 16
- 佐藤弘明 1977年「漁民の魚食行動について」渡辺仁編『生態 人類学講座第12巻』 pp.172 - 184 雄山閣出版
- 佐原真・都出比呂志編 2000年『古代史の論点 環境と食糧生産』小学館
- 末木健 1988年「縄文集落の継続性」『考古学ジャーナル』No.293 pp.16 - 19
- 菅豊 1993年「竪穴ノ遺風今尚各地ニ存セルカ・サケを「待つ」漁小屋の存立と漁撈技術・漁場使用慣行の相関について - 」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集 pp.241 - 275
- 菅豊 2000年『修験がつくる民俗史 : 鮭をめぐる儀礼と信仰』吉川弘文館
- 菅豊 1998年「柳田国男にとって北方文化 - サケをめぐる民俗の看過の問題から - 」『民具マンスリー』第31巻4号 pp.1 - 5
- 鈴木公雄 1989年『貝塚の考古学』東京大学出版会
- 鈴木保彦 1988年「縄文集落の盛衰」『考古学ジャーナル』No.293 pp.11 - 15
- スチュアート, H. / 木村秀明, 木村アヤ子訳 1987年『海と川のインディアン - 自然とわざとくらし』雄山閣出版
- 高桑守 1984年「伝統的漁民の類型化にむけて - 漁撈民俗研究への一試論 - 」『国立歴史民俗博物館研究報告』第4集 pp.57 - 69
- 高山純 1974年「サケ・マスと縄文人」『季刊人類学』第5巻 - 1号 pp.3 - 54
- 滝本誠一・向井鹿松編 1926年『日本産業資料大系』第4巻中外商業新報社
- 田子泰彦 2002年「サクラマス生息域である神通川へのサツキマスの出現」『水産増殖』50 - 2 pp.137 - 142
- 田中義昭 1986年「3 弥生時代以降の食糧生産」近藤義郎・横山浩一・甘粕健・加藤晋平・佐原真・田中琢・戸沢充則編『岩波講座 日本考古学 3 生産と流通』 pp.57 - 119 岩波書店

- 田邊悟 2001年 「日本磯漁伝統の研究()磯漁民(見突き漁民)の漁撈伝承研究」『千葉経済論叢』第24号 pp.1 - 44
- 田邊悟 2003年 「日本磯漁伝統の研究()磯漁民(見突き漁民)の漁撈伝承研究」『千葉経済論叢』第28号 pp.1 - 33
- 田辺悟 1993年 『海女(あま) ものと人間の文化史 73』法政大学出版局
- 田辺悟 1990年 『日本蜃人伝統の研究』法政大学出版局
- 田邊悟 2001年 「漁村の民俗世界」『歴史と民俗 神奈川大学日本常民文化研究所論集』17 pp.123 - 139
- 谷口康浩 1998年 「縄文集落論の争点」『國學院大學考古学資料館紀要』14輯 pp.43 - 88
- 谷口康浩 1993年 「縄文時代集落の領域」『季刊考古学』第44号 pp.67 - 71
- 知多市教育委員会編 1985年 『知多市文化財資料第21集 知多半島の漁撈文化 - 伝統漁法と習俗 - 』知多市教育委員会
- 勅使河原彰 1989年 「縄文時代集落をめぐる問題」『歴史評論』466 pp.112 - 125
- 勅使河原彰 1992年 「縄文時代の社会構成」(下)『考古学雑誌』第78巻 - 2号 pp.1 - 27
- 勅使河原彰 1992年 「縄文時代の社会構成」(上)『考古学雑誌』第78巻 - 1号 pp.1 - 44
- 樋泉岳二 1993年 「伊川津貝塚における水資源の空間的開発パターン」 櫻井清彦先生古稀記念会編 『二十一世紀への考古学：櫻井清彦先生古稀記念論文集』pp.56 - 69 雄山閣出版
- 樋泉岳二 2000年 「渥美半島とその周辺域における縄文時代晩期の漁撈活動の特色」『動物考古学』第14号 pp.23 - 38
- 樋泉岳二 1991年 「貝層の堆積季節を利用した生業季節スケジュールの復元方法とその意義 - 事例分析：伊川津貝塚における漁撈活動の季節性 - 」『国立歴史民俗博物館研究報告』第29集 pp.197 - 231
- 樋泉岳二 1999年 「東京湾地域における完新世の海洋環境変遷と縄文貝塚形成史」『国立歴史民俗博物館研究報告』第81集 pp.289-310
- トゥリーガ - ,B.G./後藤明訳 1989年 「考古学的分析と因果性の概念(上)」『考古学研究』第36巻 - 2号 pp.98 - 109
- トゥリーガ - ,B.G./後藤明訳 1990年 「考古学的分析と因果性の概念(下)」『考古学研究』第36巻 - 3号 pp.109 - 123
- 戸沢充則編 1989年 『考古学ゼミナール 縄文人と貝塚』六興出版
- 長崎元広 1988年 「縄文時代集落論の系譜」『考古学ジャーナル』293 pp.4 - 10
- 長崎元広 1980年 「縄文集落研究の系譜と展望」『駿台史学』第50号 pp.51 - 95
- 中島徳男 1980年 『改訂増補 三河湾産魚類図説』三河教育研究会
- 長棟暉友 1948年 『最新漁撈学』厚生閣
- 西田正規 2001年 「縄文時代の安定社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』第87集 pp.93 - 105
- 西田正規 1981年 「縄文時代の人間植物関係 - 食料生産の出現過程 - 」『国立民族学博物館研究報告』第6巻 - 2号 pp.234 - 255
- 西田正規 1980年 「縄文時代の食料資源と生業活動」『季刊人類学』第11巻 - 3号 pp.3 - 41

- 西田正規 1985 年 「4 縄文時代の環境」近藤義郎・横山浩一・甘粕健・加藤晋平・佐原眞・田中琢・戸沢充則編『岩波講座 日本考古学 2 人間と環境』 pp.112 - 164 岩波書店
- 二野瓶徳夫 2001 年「戦後世代旧日本常民文化研究所の漁業史研究」『歴史と民俗 神奈川大学日本常民文化研究所論集』17 pp.140 - 161
- 二野瓶徳夫 1965 年「水産業」児玉幸多編 『産業史 体系日本史叢書 11』 pp.168 - 197 山川出版社
- 日本海洋学会沿岸海洋研究部会編 1985 年『日本全国沿岸海洋誌』東海大学出版会
- 日本学士院日本科学史刊行会編 1959 年『明治前日本漁業技術史』日本学術振興会
- 日本常民文化研究所編 1957 年『日本水産史』角川書店
- 日本第四紀学会編 1987 年『日本第四紀地図』東京大学出版会
- 農商務省水産局編 1912 年『日本水産捕採誌』下巻 農商務省水産局
- 野村史隆 1993 年「伊勢湾・志摩半島・熊野灘の漁撈用具」 木下忠・網野善彦・神野善治編『日本歴史民俗論集 2 生産技術と物質文化』 pp.212 - 244 吉川弘文館
- 羽原又吉 1949 年『日本古代漁業経済史』 改造社
- 羽生淳子 1993 年「集落の大きさと居住形態」 『季刊考古学』第 44 号 pp.37 - 41
- 羽生淳子 1990 年「縄文時代の集落研究と狩猟・採集民研究の接点」『物質文化』第 53 号 pp.37 - 41
- 羽生淳子 1994 年「狩猟・採集民の生業・集落と民族誌 - 生態学的アプローチに基づいた民族誌モデルを中心として」『考古学研究』第 41 巻 - 1 号 pp.73 - 93
- 林謙作 1974 年「縄文期の集団領域 - 仙台湾を中心とした予察 - 」『考古学研究』第 20 巻 - 4 号 pp.12 - 19
- 早弓惇 1988 年「技術と適応」香原志勢編『適応人類学講座第 9 巻』 pp.183-199 雄山閣出版
- 春成秀爾 1995 年「清野謙次論」加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文文化の研究 10 縄文時代研究史』 pp.79-87 雄山閣出版
- ピアンカ, E. R. / 久場洋之, 中筋房夫, 平野耕治共訳 1980 年『進化生態学』伊藤嘉昭監修・訳蒼樹書房
- 氷見淳哉 1997 年「晩期縄文時代における狩猟漁撈活動の研究」『歴史』第 88 輯 pp.1 - 26
- 平野邦雄 1964 年「水産業」豊田武編『産業史 体系日本史叢書 10』 pp.229 - 237 山川出版社
- 廣木義久 2002 年「大規模礫質フォーセットベッド：礫嘴 - 沖合礫州モデル」『地学雑誌』第 111 巻 第 5 号 pp.609-625
- 船越茂雄 1981 年「三河湾 環境と漁業 漁業生物」『さかな(東海区水産研究所業績 C 集)』 26 pp.83 - 113
- ホッター, I / 深澤百合子訳 1997 年『過去を読む：考古学解釈のための最近の研究法』フジインタ - ナショナルプレス
- 麻柄一志 1992 年「夏の家と冬の家 - 縄文時代の季節的住み替えの可能性 - 」森浩一編『同志社大学考古学シリーズ 考古学と生活文化』pp.81 - 94 同志社大学考古学シリ - ズ刊行会
- 松井章 1985 年「「サケ・マス論」の評価と今後の展望」『考古学研究』第 31 巻 - 4 号 pp.39

- 松井章・山田格 1981年 「北海道知内町湯の里遺跡 - 竪穴住居址出土魚類の検討」『考古学研究』第27巻 - 3号 pp.74 - 85
- 松島義章 1984年 「日本列島における後氷期の浅海性貝類群集 - 特に環境変遷に伴うその時間・空間的変遷 - 」『神奈川県立博物館研究報告(自然科学)』 15号 pp.37 - 109
- 馬目順一 1982年 「釣漁と銚漁 - いわき海域を中心に - 」『季刊考古学』第1号 pp.38 - 42
- 三上徹也 1993年 「縄文時代居住システムの一様相 - 中部・関東地方の中期を中心に」『駿台史学』第88号 pp.107 - 150
- 水野正好 1969年 「縄文時代集落研究への基礎的操作」『古代文化』第21巻 3・4号 pp.1 - 21
- 溝口孝司 1997年 「考古学研究の基本構造に関する一試論 - 欧米考古学を主要な素材としての分析と提言」『考古学研究』第44巻 - 1号 pp.51 - 71
- 民族考古学研究会編 1998年 『民族考古学研究序説』 同成社
- 最上孝敬 1967年 『原始漁法の民俗』 岩崎美術社
- 森浩一 1964年 「漁業」豊田武編 『産業史 体系日本史叢書 10』 pp.54 - 70 山川出版社
- 藪内芳彦 1958年 『漁村の生態 - 人文地理学的立場 - 』 古今書院
- 山口徹 2001年 「漁業における歴史と民俗」『歴史と民俗 神奈川大学日本常民文化研究所論集』 17 pp.104 - 122
- 山内清男 1996年 「縄文式文化」(初出 1964年) 谷川健一編 『鮭・鱒の民俗 日本民俗文化資料集成第19巻』 pp.371 - 379 三一書房
- 山内清男 1996年 「縄文文化社会」(初出 1969年) 谷川健一編 『鮭・鱒の民俗 日本民俗文化資料集成第19巻』 pp.380 - 392 三一書房
- 山本典幸 1997年 「石川県真脇遺跡の居住形態とイルカ漁」『先史考古学論集』 第6集 pp.55 - 78
- 山本典幸 1999年 『縄文時代の地域生活史』 國學院大學大学院
- 山本典幸 2000年 「イルカ漁の民族考古学」『考古学研究』第47巻 - 3号 pp.24 - 43
- 横山将三郎 1955年 「渥美半島の考古学的調査研究 - 田原町遺跡群 - 」『愛知大学総合郷土研究所紀要』 第2輯 pp.1 - 32
- 吉岡郁夫 1975年 「縄文時代の漁撈 - とくに貝類の採集について - 」『びぞん通信』 No.36 pp.10 - 18
- 吉岡郁夫 1976年 「縄文時代の漁撈 - サケ・マス論について - 」『びぞん通信』 No.40 pp.1 - 7
- 四柳嘉章 1976年 「「サケ・マス論」の基盤について」『考古学研究』第23巻 - 2号 pp.67 - 78
- 米田穰 1999年 「陸の骨と海の骨 - 縄文時代貝塚の人間と動物に刻まれた海洋大循環 - 」『考古科学シンポジウム第2回』 pp.1 - 6
- リーチ,E / 青木保・宮坂敬造訳 1981年 『文化とコミュニケーション』 紀伊国屋書店
- レヴィ=ストロース,C. / 荒川幾男・生松敬三・川田順造・佐々木明・田島節夫訳 1972年 『構造人類学』 みすず書房
- 和田晴吾 1981年 「漁具資料」京都大学「考古学メモワール」編集員貝編 『考古学メモワール 1980』 pp.111 - 132 学生社
- 和田晴吾 1982年 「弥生・古墳時代の漁具」小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会編『考

- 古学論考：小林行雄博士古稀記念論文集』 pp.305 - 339 平凡社
- 渡辺仁 1964年「アイヌの熊祭の社会的機能並びにその発展に関する生態的要因」『民族学研究』第29巻 - 3号 pp.206 - 217
- 渡辺仁 1964年「アイヌの生態と本邦先史学の問題」『人類学雑誌』第72巻 - 1号 pp.9 - 22
- 渡辺仁 1988年「北太平洋沿岸文化圏 - 狩猟採集民からの視点 - 」『国立民族学博物館研究報告』第13巻 - 2号 pp.297 - 356
- 渡辺仁 1986年「狩猟採集民集落平面形の体系的分類 - 社会生態学的・進化的研究 - 」『国立民族学博物館研究報告』第11巻 - 2号 pp.489 - 541
- 渡辺仁 1978年「狩猟採集民の食性の分類 - 進化的、生態学的見地から - 」『民族学研究』第43巻 - 2号 pp.111 - 137
- 渡辺仁 1966年「縄文時代人の生態 住居の安定性とその生物学的民族史的意義」『人類学雑誌』第74巻 - 2号 pp.21 - 30
- 渡辺仁 1979年「ヒトの生活構造と適応」日本医師会編『ライフ・サイエンスの進歩 第6集 - ライフ・サイエンスと福祉国家』 pp.63 - 87 春秋社
- 渡辺仁 1986年「北東アジア猟漁民の猟漁システムの特徴とその先史的・進化的意義 () 鈎魚と弓矢漁」『麗澤大学紀要』第43巻 pp.1 - 24
- 渡辺仁 1977年「縄文時代人の生態」渡辺仁編『生態 人類学講座第12巻』 pp.337 - 351 雄山閣出版
- 渡辺仁 1977年「進化と環境」渡辺仁編『生態人類学講座第12巻』 pp.407 - 431 雄山閣出版
- 渡辺仁 2000年『縄文式階層化社会』(新装版 初出1990年) 六一書房
- 渡辺誠 1974年「縄文時代人の自然環境に対する適応の諸相」『第四紀研究』13 - 3 pp.160 - 167
- 渡辺誠 1996年「水場研究の問題点」『考古学ジャーナル』 405 pp.2 - 5
- 渡辺誠 1984年『縄文時代の植物食』雄山閣出版
- 渡辺誠 1973年『縄文時代の漁業』雄山閣出版
- 渡辺誠 1988年「縄文・弥生時代の漁業」『季刊考古学』第25号 pp.14 - 20
- 渡辺誠 2002年「考古学のための民具2・漁具」『名古屋大学博物館報告』第18号 pp.75 - 90
- 渡辺誠 1982年「縄文人の食生活」『季刊考古学』第1号 pp.14 - 17
- 渡辺誠 1985年「漁業の考古学」永原慶二・山口啓二編『講座・日本技術の社会史 第二巻 塩業・漁業』 pp.159 - 195 日本評論社
- 渡辺誠 1996年「日本石器時代文化における「サケ・マス」論の問題点」(初出1967年) 谷川健一編『鮭・鱒の民俗 日本民俗文化資料集成第19巻』 pp.393 - 397 三一書房
- 渡部裕 1998年「鈎魚(かぎもり)」『民具マンスリー』第31巻4号 pp.5 - 9

報告書等

愛知県教育委員会 1969 年 三河湾・伊勢湾漁撈習俗緊急調査報告書第 集 大島暁雄 松崎憲三 宮本袈裟雄 伊藤良吉編『日本民俗調査報告書集成 東海の民俗 愛知県編』三一書房

愛知県史編さん委員会 編 2002 年 愛知県史 愛知県史 資料編 1 考古 1 旧石器・縄文 愛知県

愛知県史民俗調査報告書 6 編集委員会 2003 年 愛知県史民俗調査報告書 6 渥美・東三河の民俗 愛知県

伊川津遺跡調査会 1995 年 渥美町埋蔵文化財調査報告書 7 伊川津遺跡 渥美町教育委員会

伊川津遺跡発掘調査団 1988 年 渥美町埋蔵文化財調査報告書 4 伊川津遺跡 渥美町教育委員会

川地遺跡調査会 1993 年 川地遺跡 渥美町教育委員会

知多古文化研究会 / 山下勝年 編 1989 年 南知多町文化財調査報告書第 8 週 神明社貝塚 南知多町教育委員会

豊橋市教育委員会 2002 年 豊橋の環境史と貝塚 豊橋市教育委員会

豊橋市教育委員会・豊橋遺跡調査会 1996 年 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 29 集 大西貝塚() 牟呂地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財報告書-大西地区 豊橋市教育委員会

豊橋市教育委員会・豊橋遺跡調査会 1997 年 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 39 集 大西貝塚() 豊橋市教育委員会

豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会 1995 年 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 19 集 大西貝塚 牟呂地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-大西地区 豊橋市教育委員会

豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会 1998 年 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 46 集 さんまい貝塚 牟呂地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-市場地区 豊橋市教育委員会

豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会 1997 年 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 36 集 水神貝塚-牟呂地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-水神地区 豊橋市教育委員会

豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会 1998 年 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 44 集 水神貝塚(第 2 貝塚)-牟呂地区区画整理事業に伴う文化財調査報告書-水神地区 豊橋市教育委員会

南知多町教育委員会 1980 年 南知多町文化財調査報告書第 4 集 先苅貝塚 南知多町教育委員会